

# 銀河鉄道の夜

宮沢賢治

青空文庫



## 一 午後の授業

「ではみなさんは、そういうふう川だと言われたり、乳ちちの流れながたあとだと言いわれたりしていた、このぼんやりと白いものがほんとうは何かご承しょう知ちですか」先生は、黒こく板ばんにつるした大きな黒い星座せいざの図の、上から下へ白くけぶった銀河帯ぎんがたいのようなところを指さしながら、みんなに問といをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四、五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いそいでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌ざっしで読んだのでし

たが、このごろはジヨバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちきもがするのです。

ところが先生は早くもそれを見つけたのでした。

「ジヨバンニさん。あなたはわかつているのでしよう」

ジヨバンニは勢いきおいよく立ちあがりましたが、立つてみるともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席せきからふりかえって、ジヨバンニを見てくすつとわらいました。

ジヨバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生がまた言いいました。

「大きな望遠鏡ぼうえんきょうで銀河ぎんがをよつく調しらべると銀河ぎんがはだいたい何で

しよう」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたが、こんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困こまったようでしたが、眼めをカムパネルラの方へ向むけて、

「ではカムパネルラさん」と名指なざしました。

するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上がったままやはり答えができませんでした。

先生は意外いがいなようにしばらくじつとカムパネルラを見ていました。が、急いそいで、

「では、よし」と言いいながら、自分で星図を指さしました。

「このぼんやりと白い銀河を大きない望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジヨバンニさんそうでしょう」

ジヨバンニはまつ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジヨバンニの眼のなかには涙がいっぱいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、もちろんカムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといつしよに読んだ雑誌のなかにあつたのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書齋から巨きな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まつ黒な頁いっぱい白に点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たの

でした。それをカムパネルラが忘れるはずもなかったのに、すぐ  
 に返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午後にも仕事  
 がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパ  
 ネルラともあんまり物を言わないようになったので、カムパネル  
 ラがそれを知ってきのどくがつてわざと返事をしなかったのだ、  
 そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれな  
 ような気がするのでした。

先生はまた言いました。

「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、そ  
 の一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にも  
 あたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるなら、もつ

と天の川とよく似にています。つまりその星はみな、乳ちちのなかにま  
るで細こまかにうかんでいる脂油あぶらの球たまにもあたるのです。そんなら何  
がその川の水にあたるかと言いいますと、それは真空しんくうという光を  
ある速はやさで伝つたえるもので、太陽たいようや地球ちきゅうもやつぱりそのなかに  
浮うかんでいるのです。つまりは私わたしどもも天の川の水のなかに棲す  
でいるわけです。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると、  
ちようど水が深いほど青く見えるように、天の川の底そこの深ふかく遠い  
ところほど星がたくさん集まって見え、したがって白くぼんやり  
見えるのです。この模も型けいをごらんなさい」

先生は中にたくさん光る砂すなのつぶのはいった大きな両面りょうめんの  
凸とつレンズを指さしました。



「天の川の形はちようどこんななのです。このいちいちの光るつ  
ぶがみんな私わたしどもの太陽たいようと同じようにじぶんで光っている星だ  
と考えます。私どもの太陽たいようがこのほぼ中ごろにあつて地球ちきゅうが  
そのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つ  
てこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こつちの方は  
レンズが薄うすいのでわずかの光る粒つぶすなわち星しか見えないでしょ  
う。こつちやこつちの方はガラスが厚あついので、光る粒つぶすなわち星  
がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるという、これが  
つまり今日の銀河ぎんがの説せつなのです。そんならこのレンズの大きさが  
どれくらいあるか、またその中のさまざまの星についてはもう時  
間ですから、この次つぎの理科の時間にお話します。では今日はその

銀河ぎんがのお祭りまつりなのですから、みなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまです。本やノートをおしまいなさい」

そして教室じゆうはしばらくつくえの蓋ふたをあけたりしめたり本かさを重ねたりする音がいつぱいでしたが、まもなくみんなはきちんと立れいつて礼れいをすると教室を出でました。

## 二 活版所かっぱんじよ

ジヨバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七、八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭こうていの隅すみの桜さくらの木のところに集あつまっていました。それはこんやの星祭ほしまつりに青いあかりをこし

らえて川へ流すなが 鳥からすうり 瓜うり を取りに行くと 相談そうだん らしかったです。  
 けれどもジョバンニは手を大きく振ふつてどしどし学校の門もんを出  
 て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河ぎんがの祭りまつにいちいの  
 葉はの玉たまをつるしたり、ひのきの枝えだにあかりをつけたり、いろいろ  
 したくをしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲まがつてある大きな活版かっぱん  
 所じよにはいって靴くつをぬいで上がりますと、突つき当たりの大きな扉とびら  
 をあけました。中にはまだ昼ひるなのに電燈でんとうがついて、たくさんの  
 輪転機りんてんきがばたりばたりとまわり、きれで頭をしぼったりラムプ  
 シエードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数え  
 たりしながらたくさん働はたらいておりました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子テーブルにすわった人の所ところへ行つておじぎをしました。その人はしばらく柵たなをさがしてから、

「これだけ拾ひろつて行けるかね」と言いながら、一枚の紙切れを渡わたしました。ジョバンニはその人の卓子テーブルの足もとから一つの小さな平ひらたい函はこをとりだして向むこうの電燈でんとうのたくさんついた、たてかけてある壁かべの隅すみの所ところへしやがみ込むと、小さなピンセットでまるで粟粒あわつぶぐらいの活字かつじを次つぎから次つぎへと拾ひろいはじめました。青い胸むねあてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君くん、お早う」と言いいますと、近くつめの四、五人の人たちが声もたてずこつちも向むかずつめに冷たくわらいました。

ジヨバンニは何べんも眼をぬぐいながら活字をだんだんひろいました。

六時がうつてしばらくたつたころ、ジヨバンニは拾った活字をいっばいに入れた平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合わせてから、さつきの卓子の人へ持つて来ました。その人は黙つてそれを受け取つてかすかにうなずきました。

ジヨバンニはおじぎをすると扉をあけて計算台のところに来ました。すると白服を着た人がやつぱりだまつて小さな銀貨を一つジヨバンニに渡しました。ジヨバンニはにわか顔に顔いろがよくなつて威勢よくおじぎをすると、台の下に置いた鞆をもつておもてへ飛びだしました。それから元気よく口笛を吹きながらパン

屋<sup>や</sup>へ寄<sup>よ</sup>つてパンの塊<sup>かたまり</sup>を一つと角砂糖<sup>かくざとう</sup>を一袋<sup>ふくろ</sup>買<sup>か</sup>いますといちもくさんに走りだしました。

### 三 家

ジヨバンニが勢<sup>いきお</sup>いよく帰<sup>か</sup>つて来たのは、ある裏<sup>うら</sup>町<sup>まち</sup>の小さな家<sup>いえ</sup>でした。その三つならんだ入口<sup>いりぐち</sup>のいちばん左<sup>ひだり</sup>側<sup>がわ</sup>には空<sup>あき</sup>箱<sup>ばこ</sup>に紫<sup>むらさき</sup>いろのケールやアスパラガスが植<sup>う</sup>えてあつて小さな二つの窓<sup>まど</sup>に日覆<sup>ひおほ</sup>いがおりましたまになつていました。

「お母<sup>はは</sup>さん、いま帰<sup>か</sup>つたよ。ぐあい悪<sup>わる</sup>くなかつたの」ジヨバンニは靴<sup>くつ</sup>をぬぎながら言<sup>い</sup>いました。

「ああ、ジヨバンニ、お仕事しごとがひどかったろう。今日は涼すずしくてね。わたしはずうつとぐあいがいいよ」

ジヨバンニは玄げん関かんを上あがって行いきますとジヨバンニのお母さんがすぐ入口へやの室むろに白しろい巾きんをかぶかぶぶって寝やすんでいたのです。ジヨバンニは窓まどをあけました。

「お母さん、今日は角砂糖かくざとうを買かってきたよ。牛乳ぎゅうにゅうに入いれてあげようと思おもって」

「ああ、お前まへさきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから」  
「お母さん。姉ねえさんはいつ帰かえったの」

「ああ、三時さんじころ帰かえったよ。みんなそこらをしてくれてね」

「お母さんの牛乳ぎゅうにゅうは来きていないんだろうか」

「来なかつたらうかねえ」

「ぼく行つてとつて来よう」

「ああ、あたしはゆつくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉<sup>ねえ</sup>さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置<sup>お</sup>いて行つたよ」

「ではぼくたべよう」

ジヨバンニは窓<sup>まど</sup>のところからトマトの皿<sup>さら</sup>をとつてパンといつしよにしばらくむしやむしやたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつとまもなく帰つてくると思うよ」

「ああ、あたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの」



「だって今朝けさの新聞に今年けねんは北きたの方かたの漁りようはたいへんよかつたと書いてあつたよ」

「ああだけどねえ、お父さんは漁りようへ出ていないかもしれない」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄かんごくへはいるようなそんな悪わる

いことをしたはずがないんだ。この前お父さんが持ってきて学校

へ寄贈きぞうした巨おおきな蟹かにの甲こうらだのとなかいの角つのだの今だつてみんな

標ひょう本ほん室しつにあるんだ。六年生じゅうねんせいなんか授じゆぎ業ぎようのとき先生せんせいがかわ

るがわる教室けうしつへ持もつて行くよ」

「お父さんはこの次つぎはおまえにラッコの上着うわぎをもつてくるといつ

たねえ」

「みんながぼくにあうとそれを言うよ。ひやかすように言うんだ」

「おまえに悪口わるくちを言うの」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して言わない。カムパネルラはみんながそんなことを言うときはきのどくそうにしているよ」

「カムパネルラのお父さんとうちのお父さんとは、ちようどおまえたちのように小さいときからのお友達ともだちだったそうだよ」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途とちゆう

中たびたびカムパネルラのうちに寄よった。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合わせるとまるくなってそれに電でん柱ちゆうや信号しんごう標ひょうもついて

いて信号標しんごうひょうのあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油せきゆをつかつたら、缶かんがすっかりすすけたよ」

「そうかねえ」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家じゆうまだしいんとしているからな」

「早いからねえ」

「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるで箒ほうきのようだ。ぼくが行くと鼻はなを鳴らしてついてくるよ。ずうっと町の角かどまでついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなからすうりで烏瓜からすうりのあかりを川へながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ」

「そうだ。今晚こんばんは銀河ぎんがのお祭りまつだねえ」

「うん。ぼく牛ぎゆう乳にゆうをとりながら見てくるよ」

「ああ行つておいで。川へははいらないでね」

「ああぼく岸きしから見るだけなんだ。一時間で行つてくるよ」

「もつと遊あそんでおいで。カムパネルラさんといっしよなら心配しんぱいはないから」

「ああきつといっしよだよ。お母さん、窓をしめておこうか」

「ああ、どうか。もう涼すずしいからね」

ジヨバンニは立つて窓まどをしめ、お皿さつらやパンの袋ふくろをかたづけると、勢いきおいよく靴くつをはいて、

「では一時間半はんで帰つてくるよ」と言いながら暗くらい戸口とぐちを出まし

た。

#### 四 ケンタウル祭の夜

ジヨバンニは、口<sup>くちぶえ</sup>笛<sup>ふ</sup>を吹<sup>ふ</sup>いているようなさびしい口つきで、  
檜<sup>ひのき</sup>のまつ黒<sup>さか</sup>にならんだ町の坂<sup>さか</sup>をおりて来たのでした。

坂<sup>さか</sup>の下に大きな一つの街<sup>がい</sup>燈<sup>とう</sup>が、青白<sup>りっぱ</sup>く立派<sup>りっぱ</sup>に光<sup>ひ</sup>つて立<sup>た</sup>つてい  
ました。ジヨバンニが、どんどん電<sup>でん</sup>燈<sup>とう</sup>の方<sup>かた</sup>へおりて行きますと、  
いままでばけもののように、長くぼんやり、うしろへ引<sup>ひ</sup>いていた  
ジヨバンニの影<sup>かげ</sup>ぼうしは、だんだん濃<sup>こ</sup>く黒<sup>くろ</sup>くはつきりなつて、足  
をあげたり手を振<sup>ふ</sup>つたり、ジヨバンニの横<sup>よこ</sup>の方<sup>かた</sup>へまわつて来るの

でした。

(ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越す。そうら、こんどはぼくの影法師はコンパスだ。あんなにくるつとまわって、前の方へ来た)

とジヨバンニが思いながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新しいえりのとがったシヤツを着て、電燈の向こう側の暗い小路から出て来て、ひらつとジヨバンニとすれちがいました。

「ザネリ、鳥瓜ながしに行くの」ジヨバンニがまだそう言うてしまわないうちに、

「ジヨバンニ、お父さんから、ラッコの上着が来るよ」その子が

投げつけるようにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぱつと胸がつめたくなり、そこらじゅうきいと鳴るように思いました。

「なんだい、ザネリ」とジョバンニは高く叫び返しましたが、もうザネリは向こうのひばの植わった家の中へはいつていました。

（ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを言うのだろう。走るときはまるで鼠のようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを言うのはザネリがばかなからだ）

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまの灯や木の枝で、すっかりきれいに飾られた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石で

こきえたふくろうの赤い眼が、くるつくるつとうごいたり、いろいろな宝<sup>ほうせき</sup>石が海のような色をした厚<sup>あつ</sup>い硝子<sup>ガラス</sup>の盤<sup>ばん</sup>に載<sup>の</sup>つて、星のようにゆつくり循<sup>めぐ</sup>つたり、また向<sup>む</sup>こう側<sup>がわ</sup>から、銅<sup>どう</sup>の人馬がゆつくりこつちへまわつて来たりするのでした。そのまん中にまるい黒い星座<sup>せいざ</sup>早見<sup>はやみ</sup>が青いアスパラガスの葉<sup>は</sup>で飾<sup>かざ</sup>つてありました。

ジヨバンニはわれを忘<sup>わす</sup>れて、その星座<sup>せいざ</sup>の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図<sup>ぼん</sup>よりはずうつと小さかったのですが、その日と時間<sup>だえんけい</sup>に合わせて盤<sup>ばん</sup>をまわすと、そのとき出ているそれがそのまま楕<sup>だえんけい</sup>円形<sup>だえんけい</sup>のなかにめぐつてあらわれるようになっており、やはりそのまん中には上から下へかけて銀河<sup>ぎんが</sup>がぼうとけむつたような帯<sup>おび</sup>になつて、その下の方ではかすかに爆<sup>ばく</sup>発<sup>はつ</sup>して湯<sup>ゆ</sup>げ



でもあげているように見えるのでした。またそのうしろには三本の脚あしのついた小さな望遠鏡ぼうえんきょうが黄いろに光つて立っていましたし、いちばんうしろの壁かべには空じゆうの星座せいざをふしぎな獣けものや蛇へびや魚や瓶びんの形に書いた大きな図ずがかかっています。ほんとうにこんなような蠍さそりだの勇士ゆうしだのそらにぎつしりいるだろうか、ああぼくはその中をどこまでも歩いてみたいと思つてたりしてしばらくぼんやり立っていました。

それからにわかにお母さんの牛乳ぎゆうにゆうのことを思いだしてジョバンニはその店をはなれました。

そしてきゆうくつな上着うわぎの肩かたを気にしながら、それでもわざと胸むねを張はつて大きく手を振ふつて町を通つて行きました。

空気は澄みきって、まるで水のように通りや店の中を流れまじたし、街燈はみなまつ青なもみや櫛の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタナスの木などは、中にたくさんの豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えるのでした。子どもらは、みんな新しい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、

「ケンタウルス、露をふらせ」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでいるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首をたれて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

ジヨバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮かんでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門をはいり、牛のおいのするうすくらい台所の前に立って、ジヨバンニは帽子をぬいで、

「今晚は」と言いましたら、家の中はしいんとして誰もいたようではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい」ジヨバンニはまっすぐに立ってまた叫びました。するとしばらくたってから、年とった女の人が、どこかぐあいが悪いようにそろそろと出て来て、何か用かと口の中で言いました。

「あの、今日、牛乳が僕んどこへ来なかつたので、もらいに

あがったんです」ジヨバンニが一生けん命勢めいきおいよく言いいました。

「いま誰だれもないでわかりません。あしたにしてください」その人は赤い眼めの下めのそこをこすりながら、ジヨバンニを見おろして言いいました。

「おつかさんが病びよう気きなんですから今こんばん晩ばんでないと困こまるんです」

「ではもう少したつてから来てください」その人はもう行いつてしままいそうでした。

「そうですか。ではありがとう」ジヨバンニは、お辞じ儀ぎをして台だいどころ所ところから出でました。

十字になつた町のかどを、まがろうとしましたら、向むこうの橋はしへ行く方の雑ざつ貨か店てんの前まへで、黒くろい影かげやぼんやり白しろいシヤツが入いり

乱みだれて、六、七人の生徒からすうりらが、口笛くちぶえを吹ふいたり笑わらったりして、  
 めいめい鳥からすうり 瓜あかりの燈火もを持つてやつて来るのを見みました。その  
 笑わらい声こちぶえも口笛くちぶえも、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジヨバ  
 ンニの同どうきゆう級こどもの子供こどもらだったのです。ジヨバンニは思おもわずどき  
 つとして戻もどろうとしましたが、思おもい直なおして、いつそう勢いきおいよくそ  
 つちへ歩いて行いきました。

「川へ行くの」ジヨバンニが言いおうとして、少しのどがつまった  
 ように思おもったとき、

「ジヨバンニ、ラツコの上着うわぎが来るよ」さっきのザネリがまた叫さけ  
 びました。

「ジヨバンニ、ラツコの上着うわぎが来るよ」すぐみんなが、続つづいて叫さけ

びました。ジョバンニはまっ赤になって、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎようと思いましたら、そのなかにカムパネルラがいたのです。カムパネルラはきのどくそうに、だまって少しわらって、おこらないだろうかというようにジョバンニの方を見ていました。

ジョバンニは、にげるようにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行ってまもなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲がる時、ふりかえって見ましたら、ザネリがやはりふりかえって見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向こうにぼんやり見える橋の方へ歩いて行ってしまったのでした。ジョバンニは、なんとも

言いえずさびしくなつて、いきなり走りだしました。すると耳に手をあてて、わあわあと言いいながら片かたあし足でぴよんぴよん跳とんでいた小さな子こども供らは、ジヨバンニがおもしろくてかけるのだと思つて、わあいと叫さけびました。

まもなくジヨバンニは走りだして黒い丘おかの方いそへ急いそぎました。

## 五 天てん氣き輪りんの柱はしら

牧ぼくじよう場じようのうしろはゆるい丘おかになつて、その黒い平たいらな頂ちようじ上ようは、北おおくまほしの大熊星の下しに、ぼんやりふだんよりも低ひくく、連つらなつて見みえました。

ジヨバンニは、もう露つゆの降おりかかった小さな林のこみちを、ど  
んどんのぼって行きました。まつくらの草や、いろいろな形に見  
えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あか  
りに照てらしだされてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びか  
りを出す小さな虫もいて、ある葉はは青くすかし出され、ジヨバン  
ニは、さつきみんなの持もつて行つた鳥からすうり 瓜うりのあかりのようだと  
も思いました。

そのまつ黒な、松まつや榎ならの林を越こえると、にわかにならんと空が  
ひらけて、天の川がしらしらと南から北へ互わたつて見えるのが見え、  
また頂いただきの、天てん氣輪きりんの柱はしらも見わけられたのでした。つりがねそう  
か野のぎくかの花が、そこらいちめんに、夢ゆめの中からもかおりだ



したというように咲き、鳥が一疋、丘の上を鳴き続けながら通つて行きました。

ジヨバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともり、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞こえて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、ジヨバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷やされました。

野原から汽車の音が聞こえてきました。その小さな列車の窓は、一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果をむいたり、わらったり、いろいろなふうに行っていると考えます。

と、ジヨバンニは、もうなんとも言えずかなしくなつて、また眼めをそらに挙げあました。

(この間原稿げんこう五枚まいふん分ぶんなし)

ところがいくら見えていても、そのそらは、ひる先生の言いつたよ  
うな、がらんとした冷つめたいとこだとは思われませんでした。それ  
どころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場ぼくじょうやら  
ある野原のほらのように考えられてしかたなかつたのです。そしてジヨ  
バンニは青い琴ことの星が、三つにも四つにもなつて、ちらちらまた  
たき、脚あしが何べんも出たり引つ込こんだりして、とうとう蕈きのこのよう  
に長く延のびるのを見ました。またすぐ眼めの下のまぢまでが、やつ  
ぱりぼんやりしたたくさんの星の集あつまりか一つの大きなけむりか

のように見えるように思いました。

## 六 銀河ステーション

そしてジヨバンニはすぐうしろの天気輪てんきりんの柱はしらがいつかぼんやりしたさんかくひょう三角標の形になって、しばらく螢ほたるのように、ぺかぺか消えたりともったりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃こい鋼青はがねのそのらの野原にたちました。いま新しく灼やいたばかりの青い鋼はがねの板いたのような、そらの野原に、まっすぐにすきつと立ったのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ぎんがステーション、銀河ぎんがステーション、銀河ぎんがステーション、銀河ぎんがステーション、銀河ぎんがステーション、

ーションと言う声が出したと思うと、いきなり眼の前が、ぱつと明るくなつて、まるで億万の螢烏賊の火を一ぺんに化石させて、そらじゆうに沈めたというぐあい、またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと穫れないふりをして、かくしておいた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかえして、ばらまいたというふうに、眼の前がさあつと明るくなつて、ジョバンニは、思わず何べんも眼をこすつてしまいました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのです。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながらすすわっていたのです。

車室の中は、青い天鷲絨を張った腰掛けが、まるでがらあきで、向こうの鼠いろのワニスを塗った壁には、真鍮の大きなぼたんが二つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたようにまつ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気がつきました。そしてそのこどもの肩のあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこつちも窓から顔を出そうとしたとき、にわかにもその子供が頭を引っ込めて、こつちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。ジヨバンニが、カムパネルラ、きみは前からここにいたの、と言おうと思った

とき、カムパネルラが、

「みんなはね、ずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった」と言いました。

ジヨバンニは、

（そうだ、ぼくたちはいま、いつしよにさそって出かけたのだ）  
とおもいながら、

「どこかで待っていていようか」と言いました。するとカムパネルラは、

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎えにきたんだ」

カムパネルラは、なぜかそう言いながら、少し顔いろが青ざめ

て、どこか苦しいくるというふうでした。するとジヨバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというような、おかしな気き持ちがしてだまってしまいました。

ところがカムパネルラは、窓まどから外をのぞきながら、もうすっかり元気が直なおって、勢いきおいよく言いいました。

「ああしまった。ぼく、水筒すいとうを忘わすれてきた。スケツチ帳ちようも忘れてきた。けれどかまわない。もうじき白鳥の停車場ていしやばだから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛とんでいたって、ぼくはきつと見える」

そして、カムパネルラは、まるい板いたのようになった地図ちずを、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まったく、その中に、白

くあらわされた天の川の左の岸きしに沿そって一条の鉄道線路てつどうせんろが、南へ南へとたどって行くのでした。そしてその地図の立派りっぱなことは、夜のようにまつ黒な盤ばんの上に、一々の停車場ていしゃばや三角標さんかくひょう、泉せんすい水みづや森が、青や橙だいだいみどりや緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。

ジヨバンニはなんだかその地図をどこかで見たとおもしろい。  
した。

「この地図ちずはどこで買ったの。黒曜石こくようせきでできてるねえ」  
ジヨバンニが言いいました。

「銀河ぎんがステーションで、もらったんだ。君きみもらわなかったの」  
「ああ、ぼく銀河ぎんがステーションを通とつたらどうか。いまぼくたちの



いるところ、ここだろう」

ジヨバンニは、白鳥と書いてある停車場ていしやばのしるしの、すぐ北を指さしました。

「そうだ。おや、あの河原かわらは月夜だろうか」そっちを見ますと、青白く光る銀河ぎんがの岸きしに、銀ぎんいろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波なみを立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河ぎんがだから光るんだよ」ジヨバンニは言いながら、まるでね上がりたいくらい愉快ゆかいになって、足をこつこつ鳴らし、窓まどから顔を出して、高く高く星めぐりの口笛くちぶえを吹ふきながら一生けん命めいの延びあがって、その天の川の水を、見きわめようと

しましたが、はじめはどうしてもそれが、はっきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素すいそよりもすきとおつて、ときどき眼めのかげんか、ちらちら紫むらさきいろのこまかな波なみをたてたり、虹にじのようにぎらつと光つたりしながら、声もなくどんどん流ながれて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐りんこう光さんかくひょうの三角標なみが、うつくしく立つていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙だいだいや黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、あるいは三さんかくけい角形い、あるいは四しへんけい辺形い、あるいは電いなずまや鎖さざりの形、さまざまにならんで、野原いっぱいいに光いつていたのでした。ジヨバンニは、まるでときどきして、頭ふをやけに振りふりました。するとほんとうに、

そのきれいな野原のはらじゆうの青や橙だいだいや、いろいろかがやく三角さんかくひよ標めも、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顫ふるえたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来た」ジヨバンニは言いました。

「それに、この汽車石炭せきたんをたいていないねえ」ジヨバンニが左手をつき出して窓まどから前の方を見ながら言いいました。

「アルコールか電気だろう」カムパネルラが言いいました。

するとちようど、それに返事へんじするように、どこか遠くの遠くのもやのもやの中から、セロのようなごうごうした声がきこえて来ました。

「ここの汽車は、ステイームや電気でうごいていない。ただうごくようにきまつているからうごいているのだ。ごとごと音をたてていると、そうおまえたちは思っているけれども、それはいままで音をたてる汽車にばかりなれているためなのだ」

「あの声、ぼくなんべんもどこかできいた」

「ぼくだって、林の中や川で、何べんも聞いた」

ごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光びこうの中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。

「ああ、りんどうの花が咲さいている。もうすっかり秋だねえ」カ  
ムパネルラが、窓まどの外を指ゆびさして言いいました。

線路せんろのへりになつたみじかい芝草しばくさの中に、月長石げつちようせきでも刻きざまれたような、すばらしい紫むらさきのりんどうの花が咲さいていました。「ぼく飛とびおりて、あいつをとつて、また飛とび乗のつてみせようか」ジヨバンニは胸むねをおどらせて言いいました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行いつてしまつたから」

カムパネルラが、そう言いつてしまふかしまわないうち、次つぎのりんどうの花が、いっばいに光あつて過すぎて行いきました。

と思おもつたら、もう次つぎから次つぎから、たくさんのきいろな底そこをもつたりんどうの花のコツプが、湧わくように、雨あめのように、眼めの前まへを通とり、二三角標さんかくひょうの列れつは、けむるように燃もえるように、いよいよ光あつて立たつたのです。

## 七 北十字とプリオシン海岸

「おつかさんは、ぼくをゆるしてくださいるだろうか」

いきなり、カムパネルラが、思い切ったというように、少しどもりながら、せきこんで言いました。

ジョバンニは、

（ああ、そうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠い一つのちりのよ  
うに見える橙いろの三角標のあたりにいらっしやつて、いま  
ぼくのことを考えているんだつた）と思ひながら、ぼんやりして  
だまっていました。

「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸さいわいになるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸さいわいなんだろう」カムパネルラは、なんだか、泣なきだしたいのを、一生けん命めいこらえているようでした。

「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじゃないの」ジヨバンニはびつくりして叫さけびました。

「ぼくわからない。けれども、誰だれだって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸さいわいなんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるしてくださいと思う」カムパネルラは、なにかほんとうに決けつしん心しんしているように見えました。

にわかには、車のなかで、ぱつと白く明るくなりました。見ると、

もうじつに、金剛石こんごうせきや草の露つゆやあらゆる立派りっぱさをあつめたよう  
 な、きらびやかな銀河ぎんがの河床かわとこの上を、水は声もなくかたちもな  
 く流れなが、その流れながのまん中に、ぼうつと青白く後光ごこうの射さした一つ  
 の島しまが見えるのでした。その島しまの平たいらなただきに、立派りっぱな眼めも  
 さめるような、白い十字架じゅうじかがたつて、それはもう、凍こおった北ほつき  
 極よくの雲くもで鑄いたといつたらいいか、すきつとした金いろの円光えんこうを  
 いただいて、しずかに永えい久きゅうに立たつていいるのでした。

「ハレルヤ、ハレルヤ」前からもうしろからも声こゑが起おこりました。  
 ふりかえつて見ると、車室くるまむらの中の旅たび人びとたちは、みなまっすぐに  
 きもののひだを垂たれ、黒いバイブルを胸むねにあてたり、水すい晶しょうの  
 数珠じゆずをかけたり、どの人もつつましく指ゆびを組み合あわせて、そっち



に祈いのっているのです。思わず二人ふたりともまつすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬ほおは、まるで熟じゆくした苹果りんごのあかしのようになつてくしかがやいて見えました。

そして島しまと十字架じゆうじかとは、だんだんうしろの方へうつって行きましました。

向むこう岸ぎしも、青じろくぼうつと光つてけむり、時々、やつぱりすすきが風にひるがえるらしく、さつとその銀ぎんいろがけむって、息いきでもかけたように見え、また、たくさんのりんどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐きつね火びのように思われましました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列れつで

さえぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうつと遠く小さく、絵のようになつてしまい、またすすきがざわざわ鳴つて、とうとうすっかり見えなくなつてしまいました。ジヨバン二のうしろには、いつから乗つていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリックふうの尼さんが、まんなるな緑の瞳を、じつとまつすぐに落として、まだ何かことばか声かが、そちから伝わつて来るのを、度んで聞いているというように見えました。旅人たちはしずかに席に戻り、二人も胸いっぴいのかなしみに似た新しい気持ちをも、何気なくちがった語で、そつと話し合つたのです。

「もうじき白鳥の停車場だねえ」

「ああ、十一時かつきりには着くんだよ」

早くも、シグナルの緑の燈と、ぼんやり白い柱とが、ちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄のほのおのようなくらいぼんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになつて、まもなくプラットホームの行列の電燈が、うつくしく規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなつてひろがつて、二人はちようど白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤面には、青く灼かれたはがねの二本の針が、くつきり十一時を指しました。みんなは、一ぺんにおいて、車室の中はがらんとなつてしまいました。

「二十分停車」と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか」ジヨバンニが言いました。

「降りよう」二人は一度にはねあがつてドアを飛び出して改札

口へかけて行きました。ところが改札口には、明るい紫がか

つた電燈が、一つ点いているばかり、誰もいませんでした。そ

こらじゆうを見ても、駅長や赤帽らしい人の、影もなかつ

たのです。

二人は、停車場の前の、水晶細工のように見える銀杏

の木に囲まれた、小さな広場に出ました。

そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通

っていました。

さきおに降りた人たちは、もうどこへ行つたか一人ひとりも見えませんでした。二人ふたりがその白い道を、肩かたをならべて行きますと、二人の影かげは、ちょうど四方まじに窓のある室へやの中の、二本の柱はしらの影かげのように、また二つの車輪しゃりんの輻やのように幾いくほん本も幾いくほん本も四方へ出るのでした。そしてまもなく、あの汽車から見えたきれいな河原かわらに來ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂すなを一つまみ、掌てのひらにひろげ、指ゆびできしきしさせながら、夢ゆめのように言いっているのです。

「この砂すなはみんな水すい晶しょうだ。中で小さな火もが燃もえている」

「そうだ」どこでぼくは、そんなことを習ならつたろうと思おもいながら、ジヨバンニもぼんやり答こたえていました。

河原の礫は、みんなすきとおつて、たしかに水晶や黄玉  
 や、またくしやくしやの皺曲をあらわしたのや、また稜から  
 霧のような青白い光を出す鋼玉やらでした。ジョバンニは、  
 走つてその渚に行つて、水に手をひたしました。けれどもあやし  
 いその銀河の水は、水素よりもつとすきとおつていたのです。  
 それでもたしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたつ  
 たところが、少し水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつ  
 つかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃  
 えるように見えたのでわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいっばいにはえている崖の下に、  
 白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿つて出ている

のでした。そこに小さな五、六人の人かげが、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立ったりかがんだり、時々なにかの道具が、ピカツと光ったりしました。

「行ってみよう」二人は、まるで一度に叫んで、そっちの方へ走りました。その白い岩になったところの入口に、「プリオシン海岸」という、瀬戸物のつるつるした標札が立って、向こうの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきのとがつたくるみの実のようなものをはひろいました。

「くるみの実だよ。そら、たくさんある。流れて来たんじやない。岩の中にはいつてるんだ」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない」

「早くあすこへ行つて見よう。きつと何か掘つてるから」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさつきの方へ近づいて行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近づいて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせ



わしそうに書きつけながら、つるはしをふりあげたり、スコップをつかったりしている、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図さしずをしていました。

「そのその突起とつきをこわさないように、スコップを使いたまえ、スコップを。おつと、もう少し遠くから掘ほつて。いけない、いけない、なぜそんな乱暴らんぼうをするんだ」

見ると、その白い柔らかな岩いわの中から、大きな大きな青じろい獣けものほねの骨が、横に倒たおれてつぶれたというふうになって、半分はんぶん以上掘ほり出だされてきました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄ひづめの二つある足跡あしあとのついた岩いわが、四角しかくに十ばかり、きれいに切り取られて番号ばんごうがつけられてありました。

「君たちは参観かね」その大学士らしい人が、眼鏡をきらつとさせて、こつちを見て話しかけました。

「くるみがたくさんあったろう。それはまあ、ざつと百二十万年ぐらい前のくるみだよ。ごく新しい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあとは海岸でね、この下からは貝からも出る。いま川の流れているところに、そつくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといつてね、おいおい、そこ、つるはしはよしたまえ。ていねいに鑿でやってくれたまえ。ボスといつてね、いまの牛の先祖で、昔はたくさんいたのさ」

「標本にするんですか」

「いや、証明しょうめいするに要いるんだ。ぼくからみると、ここは厚あつ立派りっぱな地層ちそうで、百二十万まんねん年ねんぐらい前にできたという証しょうこ拠こもいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやつぱりこんな地層ちそうに見えるかどうか、あるいは風か水や、がらんとした空かに見えやしないかということなのだ。わかつたかい。けれども、おいおい、そこもスコップではいけない。そのすぐ下に肋ろっこつ骨こつが埋うもれてるはずじゃないか」

大学士だいがくしはあわてて走はしって行いきました。

「もう時間だよ。行いこう」カムパネルラが地図と腕時計うでどけいとをくらべながら言いいました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼しつれいいたします」ジヨバンニは、

ていいねいに大学士だいがくしにおじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら」大学士だいがくしは、また忙いそがしそうに、あちこち歩きまわって監督かんとくをはじめました。

ふたり二人は、その白い岩いわの上を、一生けん命めい汽車こ車るまにおくれないように走りましました。そしてほんとうに、風のように走れたのです。息いきも切れず膝ひざもあつくなくなりませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界せかいじゆうだつてかけれると、ジヨバンニは思いました。

そしてふたり二人は、前のあの河原かわらを通り、改札口かいさつぐちの電燈でんとうがだんだん大きくなつて、まもなく二人ふたりは、もとの車室せきの席せきにすわつていま行つて来た方を、窓まどから見ていました。

八 鳥を捕とる人

「ここへかけてもようございますか」

がさがさした、けれども親切そうな、大人おとなの声が、二人ふたりのうし

ろで聞こえました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外套がいとうを着きて、白い巾きれでつつんだ荷物にもつを、二つに分けて肩かたに掛かけた、赤髯あかひげのせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです」ジョバンニは、少し肩かたをすぼめてあいさつしました。その人は、ひげの中でかすかに微笑わらいながら荷物にもつをゆ

つくり網あみだな柵さくにのせました。ジヨバンニは、なにかたいへんさびしいようなかなしいような気がして、だまつて正しょうめん面の時計とけいを見ていましたら、ずうっと前の方で、硝子ガラスの笛ふえのようなものが鳴りました。汽車はもう、しずかにうごいていたのです。カムパネルラは、車室てんじようの天井てんじようを、あちこち見ていました。その一つのあかりに黒い甲かぶとむし虫むしがとまつて、その影かげが大きく天井てんじよう井いにうつっていたのです。赤ひげの人は、なにかなつかしそうにわらいながら、ジヨバンニやカムパネルラのようなすを見ていました。汽車はもうだんだん早くなつて、すすきと川と、かわるがわる窓まどの外から光りました。

赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人に訊ききました。

「あなた方は、どちらへいらつしやるんですか」

「どこまでも行くんです」ジヨバンニは、少しきまり悪<sup>わる</sup>そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じつさい、どこまでも行きますぜ」

「あなたはどこへ行くんです」カムパネルラが、いきなり、喧嘩<sup>けんか</sup>のようにたずねましたので、ジヨバンニは思わずわらいました。すると、向<sup>む</sup>こうの席<sup>せき</sup>にいた、とがった帽子<sup>ぼうし</sup>をかぶり、大きな鍵<sup>かぎ</sup>を腰<sup>こし</sup>に下げた人も、ちらつとこつちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑<sup>わら</sup>いだしてしまいました。ところがその人は別<sup>べつ</sup>におこつたでもなく、頬<sup>ほお</sup>をぴくぴくしながら返事<sup>へんじ</sup>を

しました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商しょう売ばいでね」

「何鳥ですか」

「鶴つるや雁がんです。さぎも白鳥もです」

「鶴はたくさんいますか」

「いますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか」

「いいえ」

「いまでも聞こえるじゃありませんか。そら、耳をすまして聴きいてごらんなさい」

二人ふたりは眼めを挙あげ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひび



きと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞こえて来るのでした。

「鶴つる、どうしてとるんですか」

「鶴つるですか、それとも鷺さぎですか」

「鷺さぎです」ジヨバンニは、どっちでもいいと思ひながら答えました。

「そいつはな、雑作ぞうさない。さぎというものは、みんな天の川の砂すなが凝かたつて、ぼおつとできるもんですからね、そして始し終じゆう川へ帰りますからね、川原で待まつていて、鷺さぎがみんな、脚あしをこういうふうにしておりてくるとを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたつと押おさえちまうんです。するともう鷺さぎは、かたまつて

安心あんしんして死しんじまいます。あとはもう、わかり切きつてまさあ。

押し葉おしばにするだけです」

「鷺さぎを押し葉おしばにするんですか。標ひょうほん本ほんですか」

「標ひょうほん本ほんじゃありません。みんなたべるじゃありませんか」

「おかしいねえ」カムパネルラが首くびをかしげました。

「おかしいも不審ふしんもありませんや。そら」その男は立つて、網あみだ

棚なから包つつみをおろして、手てばやくくるくと解ときました。

「さあ、ごらんなさい。いまとつて来たばかりです」

「ほんとうに鷺さぎだねえ」二人ふたりは思わず叫さけびました。まっ白しろな、あ

のさつきの北きたの十字架じゅうじかのように光あかりる鷺さぎのからだからだが、十じゅうばかり、

少しすこしひらべつたべつたたくなつて、黒くろい脚あしをちぢめて、浮彫うきぼりのようにな

らんでいたのです。

「眼めをつぶつてるね」カムパネルラは、指ゆびでそつと、鷺さぎの三日みかづき月つきがたの白しろいつぶつた眼めにさわりました。頭あたまの上うへの槍やりのよような白しろい毛けもちやんとついていました。

「ね、そうでしょう」鳥捕とりとりは風呂敷ふうろしきを重かさねて、またくるくと包つつんで紐ひもでくくりました。誰だれがいつたいここらで鷺さぎなんぞたべるだろうとジョバンニは思おもいながら訊ききました。

「鷺さぎはおいしいんですか」

「ええ、毎日ちゆうもん注ちゆうもん文ぶんがあります。しかし雁がんの方が、もつと売うれます。雁がんの方がずつと柄がらがいいし、第だい一いち手て数すうがありませんからな。そら」鳥捕とりとりは、また別べつの方かたの包つつみを解ときました。すると黄

と青じろとまだらになつて、なにかのあかりのようにひかる雁がんが、ちようどさつきさつきの鷺さぎのように、くちばしをそろえて、少しひらべつたくなつて、ならんでいました。

「こつちはすぐたべられます。どうです、少しおあがりなさい」  
鳥捕とりとりは、黄いろの雁がんの足を、軽かるくひっぱりました。するとそれは、チョコレートでもできているように、すつときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい」鳥捕とりとりは、それを二つにちぎつてわたししました。ジヨバンニは、ちよつとたべてみて、  
(なんだ、やつぱりこいつはお菓子かしだ。チョコレートよりも、もつとおいしいけれども、こんな雁がんが飛とんでいるもんか。この男は、

どこかそこらの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、たいへんきどくだ」とおもいながら、やつぱりぼくぼくそれをたべていました。

「もう少しおあがりなさい」鳥捕りがまた包みを出しました。ジョバンニは、もつとたべたかったのですけれども、

「ええ、ありがとう」といって遠慮しましたら、鳥捕りは、こんどは向こうの席の、鍵をもった人に出しました。

「いや、商売ものをもらつちやすみませんな」その人は、帽子をとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥の景気は」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に間（一時空白）させるかつて、あつちからもこつちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こつちがやるんじやなくて、渡り鳥どもが、まつ黒にかたまつて、あかしの前を通るのですからしかたありませんや、わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのところへ持つて来たつてしかたがねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく細い大將へやれつて、こう言つてやりましたがね、はっは」

すすきがなくなつたために、向こうの野原から、ぱつとあかりが射して来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか」カムパネルラは、さつきから、

訊きこうと思つていたのです。

「それはね、鷺さぎをたべるには」鳥捕とりとりは、こつちに向むき直なおりました。天の川の水あかりに、十日もつるしておくかね、そうでなければ、砂すなに三、四日うずめなければいけないんだ。そうすると、水す銀いぎんがみんな蒸じょうはつ発はつして、たべられるようになるよ」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子かしでしょう」やっぱりおなじことを考えていたとみえて、カムパネルラが、思い切つたというように、尋たずねました。鳥捕とりとりは、何かたいへんあわてたふうで、「そうそう、ここで降おりなけあ」と言いいながら、立たつて荷物にもつをとつたと思うと、もう見えなくなつていました。

「どこへ行つたんだらう」二人ふたりは顔を見合わせましたら、燈台とうだい

守は、にやにや笑つて、少し伸びあがるようにしながら、二人の横よこの窓まどの外をのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りとりとが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光りんこうを出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立つて、まじめな顔をして両手りやうてをひろげて、じつとそらを見ていたのです。

「あすこへ行つてる。ずいぶん奇体きたいだねえ。きつとまた鳥をつかまえるとこだねえ。汽車が走つて行かないうちに、早く鳥がおりるといいな」と言いつたとたん、がらんとした桔梗きぎよういろの空から、さつき見たような鷺さぎが、まるで雪の降ふるように、ぎやあぎやあ叫さけびながら、いつぱいに舞まいおりて来ました。するとあの鳥捕りとりとは、すつかり注ちゆうもん文通りだというようにほくほくして、両足りやうあしを



かつきり六十度どに開いて立つて、鷺さぎのちぢめて降りて来る黒い脚あしを両手りょうてで片かたつぱしから押おえて、布ぬのの袋ふくろの中ちゆうに入れるのでした。すると鷺さぎは、螢ほたるのように、袋ふくろの中ちゆうでしばらく、青くぺかぺか光つたり消きえたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白しろくなって、眼めをつぶるのでした。ところが、つかまえられる鳥とりよりは、つかまえられないで無事ぶじに天あまの川がはの砂すなの上うへに降おりるものの方が多おほかったです。それは見ていると、足あしが砂すなへつくや否いなや、まるで雪ゆきの解とけるように、縮ちぢまってひらべったくなくなって、まもなく溶よう鉱こう炉ろから出でた銅どうの汁じゆうのように、砂すなや砂利じゃりの上うへにひろがり、しばらくは鳥とりの形かたちが、砂すなについているのでした。それも二、三度ど明るくなったり暗くらくなったりして、もうすっかり

まわりと同じいろになつてしまふのでした。

鳥捕りとりとは、二十疋びきばかり、袋ふくろに入れてしまふと、急きゆうに両手りようてをあげて、兵隊へいたいが鉄砲弾てつぽうだまにあたつて、死ぬしときのような形かたちをしました。と思つたら、もうそこに鳥捕りとりとの形はなくなつて、かえつて、

「ああせいせいした。どうもからだにちようど合うほど稼かせいでいるくらい、いいことはありません」というききおぼえのある声こゑが、ジョバンニの隣となりにしました。見ると鳥捕りとりとは、もうそこでとつて来た鷺さぎを、きちんとそろえて、一つずつ重かさね直なおしているのうでした。

「どうして、あすこから、いつペンにここへ来たんですか」ジョ

バンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかしな気がして問といました。

「どうしてって、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか」

ジヨバンニは、すぐ返事へんじをしようと思いましたが、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔をまっ赤にして何か思い出そうとしているのでした。

「ああ、遠くからですね」鳥捕とりとりは、わかったというように雑作ぞうさなくうなずきました。

九 ジョバンニの切符きつぷ

「もうここらは白鳥区くのおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所かんそくじよです」

まど窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物たてものが四棟むねばかり立つて、その一つの平屋根ひらやねの上に、眼めもさめるような、青宝玉石サファイアと黄玉石トパーズの大きな二つのすきとおった球たまが、輪わになってしずかにくるくるとまわっていました。黄いろのがだんだん向むこうへまわって行って、青い小さいのがこつちへ進すすんで来、まもなく二つのはじは、重かさなり合あって、きれいな緑みどりいろの両面凸りょうめんとつレンズのかたちをつくり、それもだんだん、

まん中がふくらみだして、とうとう青いのは、すっかりトパーズの正しょうめん面に来ましたので、緑みどりの中心と黄いろな明るい環わとができました。それがまただんだん横よこへ外それて、前のレンズの形ぎやくを逆かえにくり返し、とうとうすつとはなれて、サファイアは向むこうへめぐり、黄いろのはこつちへ進すすみ、またちようどさつきのようなふうになりました。銀河ぎんがの、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所そっこうじょが、睡ねむっているように、しずかによこたわったのです。

「あれは、水の速はやさをはかる器き械かいです。水も……」鳥捕とりとりが言いいかけたとき、

「切符きつぷを拜見はいけんいたします」三人の席せきの横よこに、赤い帽子ぼうしをかぶつ

たせいの高い車掌しゃしょうが、いつかまっすぐに立っていて言いました。鳥捕りとりとは、だまってかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌しゃしょうはちよつと見て、すぐ眼めをそらして（あなた方のは？）というように、指ゆびをうごかしながら、手をジヨバンニたちの方へ出しました。

「さあ」ジヨバンニは困こまって、もじもじしていましたら、カムパネルラはわけもないというふうで、小さな鼠ねずみいろの切符きっぷを出しました。ジヨバンニは、すっかりあわててしまって、もしか上着うわぎのポケットにでも、はいつていたかとおもいながら、手を入れてみましたら、何か大きなたたんだ紙きれにあたりました。こんなものはいっていたらうかと思って、急いそいで出してみましたら、それ

は四つに折おつたはがきぐらいの大きさの緑みどりいろの紙しでした。車しゃ

掌うが手を出しているもんですからなんでもかまわない、やつち

まえと思つて渡わたしましたら、車しゃ掌しょうはまつすぐに立ち直なおつてて

いねいにそれを開いて見ていました。そして読みながら上着うわぎのぼ

たんやなんかしきりに直なおしたりしてましたし燈台とうだい看守かんしゆも下

からそれを熱心ねっしんにのぞいていましたから、ジヨバンニはたしか

にあれば証明書しょうめいしょか何かだったと考かんえて少し胸むねが熱あつくなるよう

な気がしました。

「これは三次空間じくうかんの方かたからお持ちもちになつたのですか」車しゃ掌しょう

がたずねました。

「なんだかわかりません」もう大丈夫だいじょうぶだと安心しながらジヨバ

ンニはそつちを見あげてくつくつ笑わらいました。

「よろしゅうございます。南十字サウザンクロスへ着つきますのは、次つぎの第三だい

時ころになります」車掌しゃしょうは紙をジヨバンニに渡わたして向むこうへ

行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何まだったか待ちかねたというよ

うに急いそいでのできこみました。ジヨバンニも全まく早く見みたかつた

のです。ところがそれはいちめん黒い唐草からくさのような模も様ようの中に、

おかしな十ばかりの字を印刷いんさつしたもので、だまって見ていると

なんだかその中へ吸すい込こまれてしまうような気がするのでした。

すると鳥捕とりとりが横からちらつとそれを見てあわてたように言いいま

した。



「おや、こいつはたいしたもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符きつぷだ。天上どこじやない、どこでもかっつてにあるける通行券つうこうけんです。こいつをお持ちもになれあ、なるほど、こんな不完全ふかんぜんな幻想げんそう第四次だいよじの銀河鉄道ぎんがてつどうなんか、どこまででも行けるはずでさあ、あなた方あなたたいしたもんですね」

「なんだかわかりません」ジヨバンニが赤くなつて答えながら、それをまたたたんでかくしに入れました。そしてきまりが悪いわるのでカムパネルラと二人ふたり、また窓まどの外そとをながめていましたが、その鳥捕りとりとの時々たいしたもんだというように、ちらちらこつちを見ているのがぼんやりわかりました。

「もうじき驚わしての停車場いしやじょうだよ」カムパネルラが向むこう岸ぎしの、三つな

らんだ小さな青じろい さんかくひょう 三角標と、地図とを見くらべて言いました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずに、にわかにとりの鳥と捕りりがきのどくでたまらなくなりました。鷺さぎをつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包つつんだり、ひとの切符きっぷをびつくりしたように横目よこめで見えてあわててほめだしたり、そんなことを一々考えていると、もうその見ず知らずの鳥捕とりりのために、ジョバンニの持もっているものでも食べるものでもなんでもやってしまいたい、もうこの人のほんとうの幸さいわいになるなら、自分があつた光る天の川の河原かわらに立って百年つづけて立って鳥をとつてやってもいいというような気がして、どうしてももう黙だまつてい

られなくなりまして。ほんとうにあなたのほしいものはいったい何ですかと訊きこうとして、それではあんまり出し抜ぬけだから、どうしようかと考えてふり返かえつて見ましたら、そこにはもうあの鳥と捕りりがいませんでした。網あみ柵だなの上には白い荷物にもつも見えなかつたのです。また窓まどの外で足をふんばつてそらを見上げて鷺さぎを捕とるし、たくをしているのかと思つて、急いそいでそつちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂すなご子こと白いすすきの波なみばかり、あの鳥捕とりりの広いせなかもどがった帽ぼうし子こも見えませんでした。

「あの人どこへ行つたらう」カムパネルラもぼんやりそう言いつていました。

「どこへ行つたらう。いったいどこでまたあうのだらう。僕ぼくはど

うしても少しあの人に物を言わなかつたらう」

「ああ、僕もそう思っているよ」

「僕はその人が邪魔なような気がしたんだ。だから僕はたいへんつらい」ジヨバンニはこんなへんてこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで言つたこともないと思ひました。

「なんだか苹果のにおいがする。僕いま苹果のことを考えたためだろうか」カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうに苹果のにおいだよ。それから野茨のにおいもする」ジヨバンニもそこらを見ましたがやつぱりそれは窓からでもはいつて来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花のにおいにするはずはないとジヨバンニは思ひました。

そしたらにわかになそこに、つやつやした黒い髪かみの六つばかりの男の子が赤いジャケットのぼたんもかけず、ひどくびっくりしたよ  
うな顔をして、がたがたふるえてはだしで立っていました。隣とな  
には黒い洋服ようふくをきちんと着たきせいの高い青年がいつぱいに風  
吹ふかされているけやきの木のような姿勢しせいで、男の子の手をしっかりと  
ひいて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ」青年のうしろに、  
もひとり、十二ばかりの眼めの茶いろな可愛かわいらしい女の子が、黒い  
外套がいとうを着きて青年の腕うでにすがって不思議ふしぎそうに窓まどの外そとを見ている  
のでした。

「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカツト州しゅうだ。

いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召されて  
いるのです」黒服くろふくの青年はよろこびにかがやいてその女の子に  
言いました。けれどもなぜかまた額ひたいに深く皺しわを刻きざんで、それにた  
いへんつかれているらしく、無理むりに笑わらいながら男の子をジョバン  
二のとなりにするせましました。それから女の子にやさしくカムパ  
ネルラのとりの席せきを指ゆびさしました。女の子はすなおにそこへす  
わって、きちんと両手りょうてを組み合わせました。

「ぼく、おおねえさんのところへ行くんだよう」腰掛こしかけたばかりの  
男の子は顔へんを変へんにして燈台とうだい看守かんしゆの向むこうの席せきにすわったばか

りの青年に言いました。青年はなんとも言えず悲しそうな顔をして、じつとその子の、ちぢれたぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらつしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待っていらつしやったでしょう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないで、ぐるぐるにわとこのやぶをまわってあそんでいるだろうかと考えたり、ほんとうに待つて心配していらつしやるんですから、早く行って、おつかさんにお目にかかりましょうね」

「うん、だけど僕ぼく、船のに乗らなけあよかつたなあ」

「ええ、けれど、ごらんなきい、そら、どうです、あの立派りっぱな川、ね、あすこはあの夏じゆう、ツインクル、ツインクル、リトル、スターをうたつてやすむとき、いつも窓まどからぼんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光つています」

泣ないていた姉あねもハンケチで眼めをふいて外を見ました。青年は教えるようにそつと姉きょうだい弟いにまた言いいました。

「わたしたちはもう、なんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないところを旅たびして、じき神かみさまのとこへ行いきます。そこならもう、ほんとうに明るくてにおいがよくて立派りっぱな人たち



でいっぱいです。そしてわたしたちの代わりかにボートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、心配しんぱいして待つまているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元氣を出しておもしろくうたって行きましょう。青年は男の子のぬれたような黒い髪かみをなで、みんなを慰なぐさめながら、自分もだんだん顔いろがかがやいてきました。

「あなた方はどちらからいらっしやったのですか。どうなすったのですか」

さっきの燈台とうだい看守かんしゅがやつと少しわかったように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、氷山ひょうざんにぶつつかつて船が沈しずみましてね、わたしたち

はこちらののお父さんが急な用で二か月前、一足さきに本国へお帰りになつたので、あとから発つたのです。私は大学へはいついて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちようど十二日目、今日か昨日のあたりです、船が氷山にぶつつかつて一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かつたのです。ところがボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となつて、どうか小さな人たちを乗せてくださいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いて、そして子供たちのために祈ってくれました。けれどもそこからボートまでのところには、まだ

まだ小さな子どもたちや親たちやなんかいて、とても押しおのける  
勇氣ゆうきがなかったのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たた  
ちをお助けたすするのが私の義務ぎむだと思いましたから前にいる子供こら  
を押しおのけようと思いました。けれどもまた、そんなにして助けたすて  
あげるよりはこのまま神かみの御前みまえにみんなで行く方が、ほんとうに  
この方たたちの幸福こうふくだとも思いました。それからまた、その神かみに  
そむく罪つみはわたくしひとりです。よってぜひとも助けたすてあげようと  
思いました。けれども、どうしても見ているとそれができないの  
でした。子どもらばかりのボートの中へはなしてやって、お母さ  
んが狂氣きやうきのようにキスを送りおくお父さんがかなしいのをじつとこ  
らえてまっすぐに立っているなど、とてももう腸はらわたもちぎれるよう

でした。そのうち船はもうずんずん沈しずみますから、私たちはかたまって、もうすっかり覚悟かくごして、この人たち二人を抱だいて、浮うかべるだけは浮うかぼうと船の沈しずむのを待まっていました。誰だれが投なげたかライフブイが一つ飛とんで来きましたけれどもすべってずうつと向むこうへ行いってしまいました。私は一生けん命めいで甲板かんばんの格子こうしになつたとこをはなして、三人それにしつかりとりつきました。どこからともなく三〇六番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのときにわかにか大きな音がして私たちは水に落おち、もう渦うずにはいったと思おもいながらしつかりこの人たちをだいて、それからぼうつとしたと思おもつたらもうここへ来ていたのです。この方たちのお母さんは一昨さくねん年

没なくなられました。ええ、ボートはきつと助たすかったにちがいありません、なにせよほど熟じゆくれん練れんな水夫すいふたちが漕こいで、すばやく船からはなれていましたから」

そこから小さな嘆たんそく息そくやいのりの声が聞こえジョバンニもカムパネルラもいまままで忘わすれていたいろいろのことをぼんやり思い出して眼めが熱あつくなりました。

（ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったろうか。その氷ひょうざん山さんの流ながれる北のはての海で、小さな船ふねに乗のって、風かぜや凍こおりつく潮しおみず水みづや、はげしい寒さむさとたたかかって、たれかが一生いっせいけんめいはたらいている。ぼくはそのひとにほんとうにききでそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわい

のためについてはどうしたらいいのだろう)

ジヨバンニは首くびをたれて、すっかりふさぎ込こんでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいこ

とでもそれがただしいみちを進すすむ中のできごとなら、峠とうげの上り

も下りもみんなほんとうの幸こう福ふくに近づく一あしずつですから」

燈台守とうだいもりがなぐさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至いたるためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです」

青年が祈いのるようにそう答えました。

そしてあの姉きょうだい弟だいはもうつかれてめいめいぐったり席せきにより

かかって睡ねむっていました。さっきのあのはだしだった足にはいつ

か白い柔らかな靴をはいていたのです。

ごどごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みま  
した。向こうの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈のようでした。百も千もの大小さまさまの三角標、その大きなものの上には赤い点々をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集まってぼおつと青白い霧のよう、そこからか、またはもつと向こうからか、ときどきさまさまの形のぼんやりした狼煙のようなものが、かわるがわるきれいな桔梗いろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとおった奇麗な風は、ばらのおいでいっぱいでした。

「いかがですか。こういう苹果はおはじめてでしょう」向こうの

席せきの燈台とうだい看守かんしゅがいつか黄金きんと紅べにでうつくしくいろどられた大  
 きな苹果りんごを落おとさないように両手りょうてで膝ひざの上にかかえていました。  
 「おや、どつから来たのですか。立派りっぱですねえ。ここらではこん  
 な苹果りんごができるのですか」青年はほんとうにびつくりしたらしく、  
 とうだいかんしゅ看守りょうての両手りょうてにかかえられた一もりの苹果りんごを、眼めを細ほそく  
 したり首くびをまげたりしながら、われを忘わすれてながめていました。

「いや、まあおとりください。どうか、まあおとりください」

青年は一つとつてジョバンニたちの方をちよつと見ました。

「さあ、向むこうの坊ぼっちゃんがた。いかがですか。おとりください」

ジョバンニは坊ぼっちゃんといわれたので、すこししやくにさわつてだまっていますでしたが、カムパネルラは、



「ありがとう」と言いました。

すると青年は自分でとつて一つずつ二人に送おくつてよこしましたので、ジヨバンニも立つて、ありがとうと言いました。

燈台とうだい看守かんしゆはやつと両腕りやううでがあいたので、こんどは自分で一つずつ睡ねむっている姉きようだい弟ひぎの膝ひざにそつと置おきました。

「どうもありがとう。どこでできるのですか。こんな立派りっぱな苹果りんごは」

青年はつくづく見ながら言いました。

「この辺あたりではもちろん農のうぎ業ぎやうはいたしますけれどもたいはいひとりでにいいものができるとな約やく束そくになつております。農のうぎ業ぎやうだつてそんなにほねはおれはしません。たいはい自分の望のぞむ

種子たねさえ播まけばひとりでにどんどんできます。米だつてパシフィック辺へんのように殻からもないし十倍ばいも大きくてにおいしいのです。けれどもあなたがたのいらつしやる方なら農のうぎ業ぎょうはもうありません。苹果りんごだつてお菓子かしだつて、かすが少しもありませんから、みんなそのひとそのひとによつてちがった、わずかのいいかおりになつて毛あなからちらけてしまうのです」

にわかにわかに男の子がぼつちり眼めをあいて言いいました。

「ああとだなぼくいまお母つかさんの夢ゆめをみていたよ。お母つかさんがね、立派りっぱな戸棚とだなや本のあるところとこにいてね、ぼくの方かたを見て手をだしてここにこにこにこにこわらつたよ。ぼく、おつかさん。りんごをひろつてきてあげましょうか、と言いつたら眼めがさめちやつた。ああここ、

さっきの汽車のなかだねえ」

「その苹果りんごがそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ」青年が言いました。

「ありがとうございます。おや、かおるねえさんまだねてるねえ、ぼくおこしてやろう。ねえさん。ごらん、りんごをもらったよ。

おきてごらん」

姉あねはわらって眼めをさまし、まぶしそうに両手りょうてを眼めにあてて、それから苹果りんごを見ました。

男の子はまるでパイをたべるように、もうそれをたべていました。またせつかくむいたそのきれいな皮かわも、くるくるコルク抜きぬのような形になって床ゆかへ落ちるまでの間にはすうっと、灰はいいろに

光つて蒸<sup>じょうはつ</sup>発<sup>はつ</sup>してしまふのでした。

二人<sup>ふたり</sup>はりんごをたいせつにポケットにしまいました。

川下の向<sup>む</sup>こう岸<sup>ぎし</sup>に青く茂<sup>しげ</sup>った大きな林が見え、その枝<sup>えだ</sup>には熟<sup>じゆく</sup>してまつ赤に光るまるい実<sup>み</sup>がいつぱい、その林のまん中に高い高いさんかくひょう三角標<sup>さんかくひょう</sup>が立って、森の中からはオーケストラベルやジロフオンにまじってなんとも言<sup>い</sup>えずきれいな音<sup>ね</sup>いろが、とけるように浸<sup>し</sup>みるように風につれて流<sup>なが</sup>れて来るのでした。

青年はぞくつとしてからだをふるうようにしました。

だまつてその譜<sup>ふ</sup>を聞いていると、そこらにいちめん黄いろや、うすい緑<sup>みどり</sup>の明<sup>あ</sup>るい野原<sup>のほら</sup>か敷<sup>しき</sup>物<sup>もの</sup>かがひろがり、またまつ白<sup>しろ</sup>な蠟<sup>ろう</sup>のような露<sup>つゆ</sup>が太陽<sup>たいよう</sup>の面<sup>めん</sup>をかすめて行くように思われました。

「まあ、あの鳥からす」カムパネルラのとりの、かおると呼よばれた女の子が叫さけびました。

「からすでない。みんなかささぎだ」カムパネルラがまた何気なくしかるように叫さけびましたので、ジョバンニはまた思わず笑わらい、女の子はきまり悪わるそうにしました。まったく河原かわらの青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱいれっに列れつになってとまってじつと川の微光びこうを受けているのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴんと延のびていますから」青年はとりなすように言いいました。

向むこうの青い森の中の二三角標さんかくひょうはすっかり汽車の正しょう面めんに来きました。そのとき汽車のずうつとうしろの方から、あの聞きな

れた三〇六番の讚美歌さんびかのふしが聞こえてきました。よほどの人数で合がっしょう唱しょうしているらしいのでした。青年はさつと顔いろが青ざめ、たつて一ペンそつちへ行きそうにしましたが思いかえしてまたすわりました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。ジヨバンニまでなんだか鼻はなが変へんになりました。けれどもいつともなく誰だれともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジヨバンニもカムパネルラもいつしよにうたいだしたのです。

そして青い橄欖かんらんの森が、見えない天の川の向むこうにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行つてしまい、そこから流ながれて来るあやしい楽がっき器の音も、もう汽車のひびきや風の音にすりへ

らされてずうつとかすかになりました。

「あ、孔雀くじやくがいるよ。あ、孔雀くじやくがいるよ」

「あの森ライラヤビの宿でしょう。あたしきつとあの森の中にむかしの大きなオーケストラの人たちが集あつまっていらつしやると思うわ、まわりには青い孔雀くじやくやなんかたくさんいると思うわ」

「ええ、たくさんいたわ」女の子がこたえました。

ジョバンニはその小さく小さくなつていまはもう一つの緑みどりいろの貝かいぼたんのように見える森の上にさつさつと青じろく時々光つてその孔雀くじやくがはねをひろげたりとじたりする光の反はん射しゃを見ました。

「そうだ、孔雀くじやくの声だつてさつき聞こえた」カムパネルラが女

の子に言いました。

「ええ、三十疋びきぐらいはたしかにいたわ」女の子が答えました。

ジョバンニはにわかになんとも言えずかなしい気がして思わず、

「カムパネルラ、ここからはねおりて遊あそんで行こうよ」とこわい顔をして言おうとしたくらいでした。

ところがそのときジョバンニは川下の遠くの方に不思議ふしぎなもの

を見ました。それはたしかになにか黒いつるつるした細ほそなが長いも

ので、あの見えない天の川の水の上に飛とび出してちよつと弓ゆみのよ

うなかたちに進すすんで、また水の中にかくれたようでした。おかし

いと思つてまたよく気をつけていましたら、こんどはずつと近く

でまたそんなことがあつたらしいのでした。そのうちもうあつち



でもこつちでも、その黒いつるつるした変なへんものが水から飛び出して、まるく飛んでまた頭から水へくぐるのがたくさん見えてきました。みんな魚のように川上へのぼるらしいのでした。

「まあ、なんでしよう。たあちゃん。ごらんなさい。まあたくさんだわね。なんでしようあれ」

睡ねむそうに眼めをこすっていた男の子はびっくりしたように立ちあがりました。

「なんだろう」青年も立ちあがりました。

「まあ、おかしな魚だわ、なんでしようあれ」

「海豚いるかです」カムパネルラがそつちを見ながら答えました。

「海豚いるかだなんてあたしはじめてだわ。けどここ海じゃないんでし

よう」

「いるかは海にいるときまっついていない」あの不思議な低い声<sup>ふしぎひく</sup>がまたどこからかしました。

ほんとうにそのいるかのかたちのおかしいことは、二つのひれをちようど両手<sup>りょうて</sup>をさげて不動<sup>ふどう</sup>の姿勢<sup>しせい</sup>をとったようなふうにして水の中から飛び出<sup>と</sup>して来て、うやうやしく頭を下にして不動<sup>ふどう</sup>の姿勢<sup>せい</sup>のまままた水の中へくぐって行くのでした。見えない天の川の水もそのときはゆらゆらと青い焰<sup>ほのお</sup>のように波<sup>なみ</sup>をあげるのでした。「いるかお魚でしようか」女の子がカムパネルラにはなしかけました。男の子はぐったりつかれたように席<sup>せき</sup>にもたれて睡<sup>ねむ</sup>っていました。

「いるか、魚じゃありません。くじらと同じようなけだものです」  
カムパネルラが答えました。

「あなたくじら見たことあつて」

「僕ぼくあります。くじら、頭と黒いしつぽだけ見えます。潮しおを吹ふく  
とちようど本にあるようになります」

「くじらなら大きいわねえ」

「くじら大きいです。子供こどもだっているかぐらいあります」

「そうよ、あたしアラビアンナイトで見たわあね 姉ほそは細ぎんい銀いろの  
指輪ゆびわをいじりながらおもしろそうにはなししていました。

(カムパネルラ、僕ぼくもう行いつちまうぞ。僕ぼくなんか鯨くじらだつて見たこ  
とないや)

ジヨバンニはまるでたまらないほどいらしながら、それでも堅く、唇を噛んでこらえて窓の外を見ていました。その窓の外には海豚のかたちももう見えなくなって川は二つにわかれました。そのまっくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれて、その上に一人の寛い服を着て赤い帽子をかぶった男が立っていました。そして両手に赤と青の旗をもつてそらを見上げて信号しているのです。

ジヨバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふっていました。したが、にわかには赤旗をおろしてうしろにかくすようにし、青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のようにはげしく振りましました。すると空中にざあつと雨のような音がして、何

かまつくらなものが、いくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸てつぽうだまのように川の向むこうの方へ飛とんで行くのでした。ジョバンニは思わまどず窓まどからからだを半分出して、そつちを見あげました。美しい美うつくしい桔梗ききよういろのがらんとした空の下を、実じつに何万なんまんという小さな鳥どもが、幾組いくくみも幾組いくくみもめいめいせわしくせわしく鳴いて通とつて行くのでした。

「鳥が飛とんで行くな」ジョバンニが窓まどの外で言いました。

「どら」カムパネルラもそらを見ました。

そのときあのやぐらの上のゆるい服ふくの男はにわかはたに赤い旗はたをあげて狂気きやうきのようにふりうごかしました。するとぴたつと鳥の群むれは通らなくなり、それと同時にぴしやあんというつぶれたよう

な音が川下の方で起こつて、それからしばらくしいんとしました。と思つたらあの赤帽あかぼうの信号手しんごうしゅがまた青い旗はたをふつて叫さけんでいたので。

「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥」その声もはつきり聞こえました。

それといつしよにまた幾いくまん万という鳥の群むれがそらをまつすぐにかけたのです。二人ふたりの顔を出しているまん中の窓まどからあの女の子が顔を出して美うつくしい頬ほをかがやかせながらそらを仰あおぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらのきれいなこと」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意なまいき気な、いやだと思おもいながら、だまつて口をむすんでそ

らを見あげていました。女の子は小さくほっと息いきをして、だまつ席せきへ戻もどりました。カムパネルラがきのどくそうに窓まどから顔を引ひつ込こめて地図を見ていました。

「あの人鳥へ教えてるんでしよつか」女の子がそつとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥しんこうへ信号しんこうしてるんです。きつとどこからかのろしがあがるためでしょう」

カムパネルラが少しおぼつかなそうに答えました。そして車の中はしいんとなりました。ジヨバンニはもう頭を引ひつ込こめたかったのですけれども明るいとこへ顔を出すのがつらかったので、だまつてこらえてそのまま立たって口笛くちぶえを吹ふいていました。

(どうして僕はこんなになさしいのだろう。僕はもつとここちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうつと向こうにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかだ。僕はあれをよく見てここもちをしずめるんだ)

ジョバンニは熱くて痛いあたまを両手で押えるようにして、そつちの方を見ました。

(ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムパネルラだってあんな女の子とおもしろそうに談しているし僕はほんとうにつらいなあ)

ジョバンニの眼はまた涙でいっぱいになり、天の川もまるで遠



くへ行つたようにぼんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖の上を通るようになりました。向こう岸もまた黒いいろの崖が川の岸を下流に下るにしたがつて、だんだん高くなつていくのでした。そしてちらつと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きな苞が赤い毛を吐いて真珠のような実もちらつと見えたのでした。それはだんだん数を増してきて、もういまは列のように崖と線路との間にならび、思わずジョバンニが窓から顔を引つ込めて向こう側の窓を見ましたときは、美しいそらの野原の地平線のはてまで、その大きなとうもろこしの木がほとんどいちめんに植えられて、さやさや風にゆら

ぎ、その立派りつぱなちぢれた葉はのさきからは、まるでひるの間にいっぱい日光を吸すった金剛石こんごうせきのように露つゆがいつぱいについて、赤や緑みどりやきらきら燃もえて光っているのです。カムパネルラが、

「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに言いいましたけれども、ジョバンニはどうしても気持きもちがなおりませんでしたから、ただぶつきらぼうに野原を見たまま、

「そうだろう」と答えました。

そのとき汽車はだんだんしずかになつて、いくつかのシグナルとてんてつ器きの灯あかりを過ぎ、小さな停てい車しゃ場ばにとまりました。

その正しょう面めんの青じろい時計とけいはかつきり第二時だいにじを示しめし、風もなくなり汽車もうごかず、しずかなしずかな野原のなかにその振ふり

子はカチツカチツと正しく時を刻んでいくのでした。

そしてまったくその振り子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。

「新世界交響楽だわ」向こうの席の姉がひとりごとのようにこつちを見ながらそつと言いました。

まったく全くもう車の中ではあの黒服の丈高い青年も誰もみんなやさしい夢を見ているのでした。

（こんなしずかないとここで僕はどうしてもっと愉快になれないだろう。どうしてこんなにひとりさびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といっしょに汽車に乗って

いながら、まるであんな女の子とばかり談はなしているんだもの。僕ぼくはほんとうにつらい)

ジョバンニはまた手で顔を半はんぶん分かくすようにして向むこうの窓まどのそとを見つめていました。

すきとおった硝子ガラスのような笛ふえが鳴って汽車はしずかに動きだし、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口くちふえ笛ふを吹きました。

「ええ、ええ、もうこの辺へんはひどい高原ですから」

うしろの方で誰だれかとしよりらしい人の、いま眼めがさめたというふうではきはき談はなしている声がしました。

「どうもろこしだって棒ぼうで二尺も孔あなをあけておいてそこへ播まかないとはえないんです」

「そうですか。川まではよほどありましようかねえ」

「ええ、ええ、河<sup>かわ</sup>までは二千尺<sup>じやく</sup>から六千尺<sup>じやく</sup>あります。もうまるでひどい峡<sup>きやうこく</sup>谷<sup>こく</sup>になつています」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかつたらうか、ジヨバンニは思<sup>おも</sup>わ<sup>わ</sup>ず<sup>ず</sup>そう思<sup>おも</sup>いま<sup>ま</sup>した。

あの姉<sup>あね</sup>は弟<sup>あね</sup>を自<sup>おの</sup>分<sup>の</sup>の胸<sup>むね</sup>によりか<sup>か</sup>から<sup>ら</sup>せて<sup>て</sup>睡<sup>ねむ</sup>らせ<sup>せ</sup>な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>ら<sup>ら</sup>黒<sup>くろ</sup>い<sup>い</sup>瞳<sup>ひとみ</sup>をう<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>遠<sup>とほ</sup>く<sup>く</sup>へ<sup>へ</sup>投<sup>な</sup>げ<sup>げ</sup>て<sup>て</sup>何<sup>なに</sup>を見<sup>み</sup>る<sup>る</sup>でも<sup>も</sup>な<sup>な</sup>し<sup>し</sup>に<sup>に</sup>考<sup>こ</sup>え<sup>え</sup>込<sup>こ</sup>んで<sup>で</sup>いる<sup>る</sup>のでしたし、カムパネ<sup>カムパネ</sup>ル<sup>ル</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>だ<sup>だ</sup>さ<sup>さ</sup>び<sup>び</sup>し<sup>し</sup>そう<sup>そう</sup>に<sup>に</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>口<sup>くち</sup>笛<sup>ぶえ</sup>を<sup>を</sup>吹<sup>ふ</sup>き、男<sup>おとこ</sup>の子<sup>こ</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>で<sup>で</sup>絹<sup>きぬ</sup>で<sup>で</sup>包<sup>つつ</sup>ん<sup>ん</sup>だ<sup>だ</sup>苹<sup>りん</sup>果<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>顔<sup>かほ</sup>いろ<sup>いろ</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>ジ<sup>ジ</sup>ヨ<sup>ヨ</sup>バ<sup>バ</sup>ン<sup>ン</sup>ニ<sup>ニ</sup>の<sup>の</sup>見<sup>み</sup>る<sup>る</sup>方<sup>かた</sup>を見<sup>み</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>ので<sup>ので</sup>した。

突<sup>とつ</sup>然<sup>ぜん</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>も<sup>も</sup>ろ<sup>ろ</sup>こ<sup>こ</sup>し<sup>し</sup>が<sup>が</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>な<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>巨<sup>おお</sup>き<sup>き</sup>な<sup>な</sup>黒<sup>くろ</sup>い<sup>い</sup>野<sup>の</sup>原<sup>はら</sup>が<sup>が</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>ぱ<sup>ぱ</sup>いに

ひらけました。

新世界交響樂しんせかいこうきようがくはいよいよはつきり地平線ちへいせんのはてから湧き、そのまっ黒な野原のほらのなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根はねを頭につけ、たくさんうでの石を腕と胸むねにかざり、小さな弓ゆみに矢やをつがえていちもくさんに汽車を追おつて来るのでした。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。おねえさまごろんなさい」

黒服くろふくの青年も眼めをさしました。

ジヨバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走つて来るわ、あら、走つて来るわ。追おいかけているんでしょ  
う」

「いいえ、汽車を追<sup>お</sup>つてるんじゃないんですよ。獵<sup>りよう</sup>をするか踊<sup>おど</sup>るかしてるんですよ」

青年はいまどこにいるか忘<sup>わす</sup>れたというふう<sup>ふう</sup>にポケットに手を入<sup>い</sup>れて立ちながら言<sup>い</sup>いました。

まったくインデアンは半<sup>はん</sup>分<sup>ぶん</sup>は踊<sup>おど</sup>っているようでした。第<sup>だい</sup>一<sup>いち</sup>かけるにしても足のふみようがもつと経<sup>けい</sup>済<sup>さい</sup>もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽<sup>は</sup>根<sup>ね</sup>は前<sup>まへ</sup>の方<sup>た</sup>へ倒<sup>たお</sup>れるようになり、インデアンはびたつと立ちどまって、すばやく弓<sup>ゆみ</sup>を空<sup>そら</sup>にひきました。そこから一羽<sup>わ</sup>の鶴<sup>つる</sup>がふらふらと落<sup>お</sup>ちて来て、また走り出したインデアンの大きくひろげた両<sup>りよう</sup>手<sup>て</sup>に落<sup>お</sup>ちこみました。インデアンはうれしそうに立<sup>た</sup>ってわらいました。そしてその鶴<sup>つる</sup>を

もつてこつちを見ている影も、もうどんどん小さく遠くなり、電  
しんばしらの碇子がきらつきらつと続いて二つばかり光つて、ま  
たとうもろこしの林になつてしまいました。こつち側の窓を見ま  
すと汽車はほんとうに高い高い崖の上を走つていて、その谷の底  
には川がやっぱり幅ひろく明るく流れていたのです。

「ええ、もうこの辺から下りです。なんせこんどは一ぺんにあの  
水面までおりて行くんですから容易じゃありません。この傾  
斜があるもんですから汽車は決して向こうからこつちへは来な  
いんです。そら、もうだんだん早くなつたでしょう」さつきの老  
人らしい声が言いました。

どんどんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道



がかかるときは川が明るく下にのぞけたのです。ジヨバンニはだんだんこころもちが明るくなってきました。汽車が小さな小屋の前を通つて、その前にしよんぼりひとりの子供が立つてこつちを見ているときなどは思わず、ほう、と叫びました。

どんどんどんどん汽車は走つて行きました。室中のひとた

ちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛にしつかり

しがみついています。ジヨバンニは思わずカムパネルラとわらいました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほど

激しく流れて来たらしく、ときどきちらちら光つてながれているのでした。うすあかい河原なでこの花があちこち咲いています。汽車はようやく落ち着いたようにゆっくり走っていました。

向<sup>む</sup>こうとこつちの岸<sup>きし</sup>に星のかたちとつるはしを書いた旗<sup>はた</sup>がたつていました。

「あれなんの旗<sup>はた</sup>だろうね」ジヨバンニがやつとものを言いました。  
「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄<sup>てつ</sup>の舟<sup>ふね</sup>がおいであるねえ」

「ああ」

「橋<sup>はし</sup>を架<sup>か</sup>けるとこじやないんでしようか」女の子が言いました。  
「ああ、あれ工<sup>こう</sup>兵<sup>へい</sup>の旗<sup>はた</sup>だねえ。架<sup>か</sup>き橋<sup>きょう</sup>演<sup>えん</sup>習<sup>じゆう</sup>をしてるんだ。けれど兵<sup>へい</sup>隊<sup>たい</sup>のかたちが見えないねえ」

その時向<sup>む</sup>こう岸<sup>ぎし</sup>ちかくの少し下<sup>かり</sup>流<sup>りゅう</sup>の方で、見えない天の川の水がぎらつと光つて、柱<sup>はしら</sup>のように高くはねあがり、どおとはげし

い音がしました。

「発破はつぱだよ、発破はつぱだよ」カムパネルラはこおどりました。

その柱はしらのようになった水は見えなくなり、大きな鮭さけや鱒ますがきらつきらつと白く腹はらを光らせて空中にほうり出されてまるい輪わを描えがいてまた水に落おちました。ジヨバンニはもうはねあがりたくらい気持ちきもちが軽かるくなつて言いいました。

「空こうの工兵へい大隊だいたいだ。どうだ、鱒ますなんかまるでこんなになつてはねあげられたねえ。僕ぼくこんな愉快ゆかいな旅たびはしたことない。いいねえ」

「あの鱒ますなら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかないるんだな、この水の中に」

「小さなお魚もいるんでしょうか」女の子が談はなしにつり込まれて言いいました。

「いるんでしょう。大きなのがいるんだから小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだから、いま小さいの見えなかつたねえ」ジヨバンニはもうすっかり機嫌きげんが直なおつておもしろそうにわらつて女の子に答えました。

「あれきつと双子ふたごのお星さまのお宮みやだよ」男の子がいきなり窓まどの外そとをさして叫さけびました。

右手みぎの低い丘おかの上に小さな水すい晶しょうでもこさえたような二つのお宮みやがならんで立たつていました。

「双子ふたごのお星さまのお宮みやつてなんだい」

「あたし前になんべんもお母さんつかから聞いたわ。ちやんと小さな水すいしょう晶みやのお宮みやで二つならんでいるからきつとそうだわ」

「はなしてごらん。双子ふたごのお星さまが何をしたつての」

「ぼくも知ってらい。双子ふたごのお星さまが野原へ遊びあそびにでて、からすと喧嘩けんかしたんだろう」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸きしにね、おつかさんお話しなすつたわ、……」

「それから彗ほうきぼし星ほしがギーギーフーギーフーて言いつて来たねえ」

「いやだわ、たあちゃん、そうじゃないわよ。それはべつの方かただわ」

「するとあすこにいま笛ふえを吹ふいているんだらうか」

「いま海へ行つてらあ」

「いけないわよ。もう海からあがつていらつしやつたのよ」

「そうそう。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししよう」

川の向こう岸ぎしがにわかぎしに赤くなりました。

楊やなぎの木や何かもまつ黒にすかし出され、見えない天の川の波なみも、

ときどきちらちら針はりのように赤く光りました。まったく向むこう岸ぎし

の野原に大きなまつ赤な火もやが燃もされ、その黒いけむりは高く桔きぎよ

梗ういろのつめたそうな天をも焦こがしそうでした。ルビーよりも

赤くすきとおり、リチウムよりもうつくしく酔よつたようになつて、

その火は燃<sup>も</sup>えているのでした。

「あれはなんの火だろう。あんな赤く光る火は何を燃<sup>も</sup>やせばできるんだろう」ジヨバンニが言<sup>い</sup>いました。

「蠍<sup>さそり</sup>の火だな」カムパネルラがまた地図と首<sup>くび</sup>つびきして答<sup>こ</sup>えました。

「あら、蠍<sup>さそり</sup>の火のことならあたし知<sup>ち</sup>ってるわ」

「蠍<sup>さそり</sup>の火ってなんだい」ジヨバンニがききました。

「蠍<sup>さそり</sup>がやけて死<sup>し</sup>んだのよ。その火がいまでも燃<sup>も</sup>えてるって、あたし何<sup>なに</sup>べんもお父<sup>ちち</sup>さんから聴<sup>き</sup>いたわ」

「蠍<sup>さそり</sup>って、虫<sup>むし</sup>だろう」

「ええ、蠍<sup>さそり</sup>は虫<sup>むし</sup>よ。だけどいい虫<sup>むし</sup>だわ」

「さそり  
蠍さそりいい虫じゃないよ。僕ぼく博物館はくぶつかんでアルコールにつけてあるの  
見た。尾おにこんなかぎがあつてそれで螫さされると死ぬしつて先生が  
言いつてたよ」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さんこう言いつたのよ。むかし  
のバルドラの野原に一ぴきの蠍さそりがいて小さな虫やなんか殺ころしてた  
べて生きていたんですつて。するとある日いたちに見みつかつて食  
べられそうになつたんですつて。さそりは一生けん命めいにげてにげ  
たけど、とうとういたちを押おさえられそうになつたわ、そのときい  
きなり前に井戸いどがあつてその中に落おちてしまつたわ、もうどうし  
てもあがられないで、さそりはおぼれはじめたのよ。そのときさ  
そりはこう言いつてお祈いのりしたというの。



ああ、わたしはいままで、いくつのもの命をとったかわからない、そしてその私がかんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになってしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだを、だまっていたちにくれてやらなかったろう。もししたら私たちも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をぐらんでください。こんなにむなく命をすてず、どうかこの次には、まことのみんなの幸のために私のからだをおつかいください。つて言つたというの。

もしたらいつか蠍はじぶんのからだか、まっ赤なうつくしい火になって燃えて、よるのやみを照らしているのを見たつて。いま

でも燃えてるってお父さんおっしやったわ。ほんとうにあの火、それだわ」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標さんかくひょうはちようどさそりの形にならんでいるよ」

ジヨバンニはまったくその大きな火の向こうむこうに三つの三角標さんかくひょうが、ちようどさそりの腕うでのように、こつちに五つの三角標さんかくひょうがさそりの尾おやかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまっ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれて、みんなはなんとも言えずにぎやかな、さまざまの楽がくの音ねや草花くさなのにおいのような

もの、口笛くちぶえや人々のざわざわ言う声やらを聞きました。それはもうじきちかくに町か何かがあつて、そこにお祭りまつでもあるとうような気がするのです。

「ケンタウル露つゆをふらせ」いきなりいままで睡ねむっていたジヨバン二のとなりの男の子が向むここの窓まどを見ながら叫さけんでいました。

ああそこにはクリスマスストリイのようにまつ青な唐檜とうひかもみの木がたつて、その中にはたくさんまめでんとうの豆電燈とうがまるで千の蛍ほたるでも集あつまったようについていました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭さいだねえ」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ」カムパネルラがすぐ言いました。

(此の間原稿なし)

「ボール投げなら僕決してはずさない」

男の子が大いばりで言いました。

「もうじきサウザンクロスです。おりるしたくをしてください」  
青年がみんなに言いました。

「僕、もう少し汽車に乗ってるんだよ」男の子が言いました。

カムパネルラのとりの女の子はそわそわ立ってしたくをはじめましたけれどもやっぱりジヨバンニたちとわかれたくないよう  
なようすでした。

「ここでおりにけあいけないのです」青年はきちつと口を結んで  
男の子を見おろしながら言いました。

「厭<sup>いや</sup>だい。僕<sup>ぼく</sup>もう少し汽車へ乗<sup>の</sup>つてから行くんだい」

「ジョバンニがこらえかねて言<sup>い</sup>いました。」

「僕<sup>ぼく</sup>たちといっしょに乗<sup>の</sup>つて行<sup>い</sup>こう。僕<sup>ぼく</sup>たちどこまでだつて行<sup>い</sup>ける切符持<sup>も</sup>つてるんだ」

「だけどあたしたち、もうここで降<sup>お</sup>りなけあいけないのよ。ここ天上へ行くとこなんだから」

女の子がさびしそうに言<sup>い</sup>いました。

「天上へなんか行<sup>い</sup>かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもつといいところをこさえなけあいけないつて僕<sup>ぼく</sup>の先生<sup>せんせい</sup>が言<sup>い</sup>つたよ」

「だつておつ母<sup>か</sup>さんも行<sup>い</sup>つてらつしやるし、それに神<sup>かみ</sup>さまがおつ

しやるんだわ」

「そんな神さまかみまうその神さまかみまだい」

「あなたの神さまかみまうその神さまかみよ」

「そうじゃないよ」

「あなたの神さまかみまってどんな神さまかみですか」青年は笑わらいながら言いいました。

「ぼくほんとうはよく知りません。けれどもそんなんでなしに、ほんとうのたった一人ひとりの神さまかみです」

「ほんとうの神さまかみはもちろんたった一人ひとりです」

「ああ、そんなんでなしに、たったひとりのほんとうの神さまかみです」

「だからそうじやありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまかみの前に、わたくしたちとお会いになることを祈いのります」青年はつつましく両手りょうてを組みました。

女の子もちようどその通りにしました。みんなほんとうに別れわかが惜おしそうで、その顔いろも少し青ざめて見えました。ジヨバン二はあぶなく声をあげて泣なき出そうとしました。

「さあもうしたくはいいんですか。じきサウザンクロスですから」ああそのときでした。見えない天の川のずうっと川下に青や橙だいたいや、もうあらゆる光でちりばめられた十字架じゆうじかが、まるで一本の木というふうわに川の中から立つてかがやき、その上には青じろい雲がまるい環わになって後光のようにかかっているのです。汽車

の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまつすぐに立つてお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも子供が瓜うりに飛とびついたときのようなよろこびの声や、なんとも言いようない深ふかいつつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架じゆうじかは窓まどの正しょう面めんになり、あの苹果りんごの肉にくのような青じろい環わの雲も、ゆるやかにゆるやかに繞めぐっているのが見えました。

「ハレルヤ、ハレルヤ」明るくたのしくみんなの声はひびき、みんなはそのそらの遠くから、つめたいそらの遠くから、すきとおったなんとも言いえざさわやかなラツパの声をききました。そしてたくさんでんとうのシグナルや電燈あかりの灯あかりのなかを汽車はだんだんゆるや



かになり、とうとう十字架じゆうじかのちょうどま向むかいに行つてすつかりとまりました。

「さあ、おりるんですよ」青年は男の子の手をひき姉あねは互たがいにえりや肩かたをなおしてやってだんだん向むこうの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら」女の子がふりかえつて二人に言いいました。

「さよなら」ジョバンニはまるで泣なき出したいのをこらえておこつたようにぶつきらぼうに言いいました。

女の子はいかにもつらそうに眼めを大きくして、も一度どこつちをふりかえつて、それからあとはもうだまって出て行つてしまいました。汽車の中はもう半はん分ぶん以い上じょうも空すいてしまいにわかになら

んとして、さびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。

そして見てみるとみんなはつつましく列を組んで、あの十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたって、ひとりのこうごうしい白いきもの人が手をのばしてこつちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう硝子の呼び子は鳴らされ汽車はうごきだし、と思ううちに銀いろの霧が川下の方から、すうつと流れて来て、もうそつちは何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち、黄金の円光をもつた電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

そのとき、すうつと霧きりがはれかかりました。どこかへ行く街かいど道うらしく小さな電燈でんとうのいちれつ一列いについて進すすんでいました。それはしばらく線路せんろに沿そつて進すすんでいました。そして二人ふたりがそのあかしの前を通つて行くときは、その小さな豆まめいろの火はちようどあいさつでもするようにほかつと消きえ、二人ふたりが過ふぎて行くときまた点つくのでした。

ふりかえつて見ると、さつきの十字架じゆうじかはすつかり小さくなつてしまい、ほんとうにもうそのまま胸むねにもつるされそうになり、さつきの女の子や青年たちがその前の白しろい渚なぎさにまだひざまずいているのか、それともどこか方角ほうかくもわからないその天上へ行つたのか、ぼんやりして見分けられませんでした。

ジヨバンニは、ああ、と深く息ふかいきしました。

「カムパネルラ、また僕ぼくたち二人ふたりきりになつたねえ、どこまでもどこまでもいつしよに行こう。僕ぼくはもう、あのさそりのように、ほんとうにみんなの幸さいわいのためならば僕ぼくのからだなんか百ペン灼やいてもかまわない」

「うん。僕ぼくだつてそうだ」カムパネルラの眼めにはきれいな涙なみだがうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいはいつたいなんだろう」

ジヨバンニが言いいました。

「僕ぼくわからない」カムパネルラがぼんやり言いいました。

「僕ぼくたちしつかりやろうねえ」ジヨバンニが胸むねいっぱい新しい力

が湧くように、ふうと息をしながら言いました。

「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ」カムパネルラが少しそつちを避けるようにしながら天の川のひととを指さしました。

ジヨバンニはそつちを見て、まるでぎくつとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまつくらな孔が、どおんとあいているのです。その底がどれほど深いか、その奥に何があるか、いくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えず、ただ眼がしんしんと痛むのでした。ジヨバンニが言いました。

「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕た

ちいつしよに進<sup>すす</sup>んで行こう」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集<sup>あつ</sup>まつてるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつ、あすこにいるのはぼくのお母さんだよ」

カムパネルラはにわか<sup>まど</sup>に窓の遠くに見えるきれいな野原を指<sup>さ</sup>して叫<sup>さけ</sup>びました。

ジョバンニもそつちを見ましたけれども、そこはぼんやり白くけむっているばかり、どうしてもカムパネルラが言<sup>い</sup>ったように思われませんでした。

なんとも言<sup>い</sup>えなさびしい気がして、ぼんやりそつちを見ていましたら、向<sup>む</sup>ここの河<sup>かわ</sup>岸<sup>ぎし</sup>に二本の電<sup>でん</sup>信<sup>しん</sup>ばしらが、ちようど両<sup>りょう</sup>

方ほうから腕うでを組くんだように赤い腕木うでぎをつらねて立たっていました。  
「カムパネルラ、僕ぼくたちいつしよに行いこうねえ」ジヨバンニがこ  
う言いいながらふりかえって見みましたら、そのいままでカムパネル  
ラのすわっていた席せきに、もうカムパネルラの形かたちは見みえず、ただ黒  
いびろうどばかりひかっつていました。

ジヨバンニはまるで鉄砲丸てつぱうだまのように立ちあがりました。そし  
て誰だれにも聞きこえないように窓まどの外そとへからだを乗のり出して、力ちからいっ  
ぱいはげしく胸むねをううって叫さけび、それからもう咽喉のどいっいぱい泣なきだ  
しました。

もうそこらが一ぺんにままつくらにななったように思おもいました。そ  
のとき、

「おまえはいつたい何を泣ないているの。ちよつとこつちをござらん  
いままでたびたび聞こえた、あのやさしいセロのような声が、ジ  
ヨバンニのうしろから聞こえました。

ジヨバンニは、はつと思つて涙なみだをはらつてそつちをふり向きま  
した、さつきまでカムパネルラのすわっていた席せきに黒い大きな帽ぼう  
子うしをかぶつた青白い顔のやさした大人おとなが、やさしくわらつて大きな  
一冊さつの本をもっていました。

「おまえのともだちがどこかへ行つたのだろう。あのひとはね、  
ほんとうにこんや遠くへ行つたのだ。おまえはもうカムパネルラ  
をさがしてもむだだ」

「ああ、どうしてなんですか。ぼくはカムパネルラといっしよに



まっすぐに行こうと言ったんです」

「ああ、そうだ。みんながそう考える。けれどもいつしよに行けない。そしてみんながカムパネルラだ。おまえがあうどんなひとでも、みんな何べんもおまえといつしよに苹果りんごをたべたり汽車に乗のつたりしたのだ。だからやっぱりおまえはさつき考えたように、あらゆるひとのいちばんの幸福こつぷくをさがし、みんなといつしよに早くそこに行くがいい、そこでばかりおまえはほんとうにカムパネルラといつまでもいつしよに行けるのだ」

「ああぼくはきつとそうします。ぼくはどうしてそれをもとめたいでしょう」

「ああわたくしもそれをもとめている。おまえはおまえの切符きっぷを

しつかりもつておいで。そして一しんに勉強べんきようしなけあいけな  
 い。おまえは化学かがくをならつたろう、水は酸素さんそと水素すいそからできてい  
 るということを知っている。いまはたれだつてそれを疑うたがやしない。  
 実験じっけんしてみるとほんとうにそうなんだから。けれども昔むかしはそれ  
 を水銀すいぎんと塩しおでできていると言いつたり、水銀すいぎんと硫黄いおうでできてい  
 ると言いつたりいろいろ議論ぎろんしたのだ。みんながめいめいじぶんの  
 神さまかみがほんとうの神さまだというだろう、けれどもお互たがいほか  
 の神さまかみを信しんずる人たちのしたことでも涙なみだがこぼれるだろう。そ  
 れからぼくたちの心がいいとかわるいとか議論ぎろんするだろう。そし  
 て勝負しょうぶがつかないだろう。けれども、もしおまえがほんとうに  
 勉強べんきようして実験じっけんでちゃんとほんとうの考えと、うその考えと

を分けてしまえば、その実験じつけんの方法ほうほうさえきまれば、もう信しんこ  
 仰うも化学かがくと同じようになる。けれども、ね、ちよつとこの本を  
 ごらん、いいかい、これは地理ちりと歴史れきしの辞典じてんだよ。この本のこの  
 頁ページはね、紀元前きげんぜん二千二百年の地理ちりと歴史れきしが書いてある。よくご  
 らん、紀元前きげんぜん二千二百年のことでないよ、紀元前きげんぜん二千二百年  
 のころにみんなが考えていた地理ちりと歴史れきしというものが書いてある。  
 だからこの頁ページ一つが一冊さつの地歴ちれきの本にあたるんだ。いいかい、  
 そしてこの中に書いてあることは紀元前きげんぜん二千二百年ころにはた  
 いてい本ほん当とうだ。さがすと証しょうこ拠こもぞくぞく出ている。けれども  
 それが少しどうかなどこう考えだしてごらん、そら、それは次つぎの  
 頁ページだよ。

紀元前<sup>きげんぜん</sup>一千年。だいぶ、地理<sup>ちり</sup>も歴史<sup>れきし</sup>も変わ<sup>か</sup>つてるだろう。このときにはこうなのだ。変<sup>へん</sup>な顔をしてはいけない。ぼくたちはぼくたちのからだだつて考えだつて、天の川だつて汽車だつて歴史<sup>れきし</sup>だつて、ただそう感じているのなんだから、そらごらん、ぼくといつしよにすこしこころもちをしずかにしてごらん。いいか」

そのひとは指<sup>ゆび</sup>を一本あげてしずかにそれをおろしました。するといきなりジヨバンニは自分というものが、じぶんの考えというもの、汽車やその学<sup>がくしや</sup>者や天の川や、みんないつしよにほかつと光つて、しいんとなくなつて、ほかつともつてまたなくなつて、そしてその一つがほかつともると、あらゆる広<sup>ひろ</sup>い世界<sup>せかい</sup>ががらんとひらけ、あらゆる歴史<sup>れきし</sup>がそなわり、すつと消<sup>き</sup>えると、もう

がらんとした、ただもうそれつきりになってしまふのを見ました。だんだんそれが早くなつて、まもなくすつかりもとのとおりになりました。

「さあいいか。だからおまえの実験じっけんは、このきれぎれの考えのはじめから終おわりすべてにわたるようになければいけない。それがむずかしいことなのだ。けれども、もちろんそのときだけのもいいのだ。ああごらん、あすこにプレシオスが見える。おまえはあのプレシオスの鎖くさりを解とかなければならない」

そのときまつくらな地平線ちへいせんの向むこうから青じろいのろしが、まるでひるまのようになりあげられ、汽車の中はすつかり明るくなりました。そしてのろしは高くそらにかかつて光りつづけまし

た。

「ああマジエランの星雲だ。さあもうきつと僕は僕のために、僕のお母さんのために、カムパネルラのために、みんなのために、ほんとうのほんとうの幸福をさがすぞ」

ジョバンニは唇を噛んで、そのマジエランの星雲をのぞんで立ちました。そのいちばん幸福なそのひとのために！

「さあ、切符をしっかりと持っておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしにほんとうの世界の火やばげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。天の川のなかでたった一つの、ほんとうのその切符を決しておまえはなくしてはいけない」

あのセロのような声がしたと思うとジョバンニは、あの天の川

がもうまるで遠く遠くなつて風が吹き自分はまっすぐに草の丘に立っているのを見、また遠くからあのブルカニロ博士の足おとのしずかに近づいて来るのをききました。

「ありがとう。私はたいへんいい実験をした。私はこんなしずかな場所で遠くから私の考えを人に伝える実験をしたいときつき考えていた。お前の言つた語はみんな私の手帳にとつてある。さあ帰つておやすみ。お前は夢の中で決心したとおりまっすぐに進んで行くがいい。そしてこれからなんでもいつでも私のところへ相談においでなさい」

「僕きつとまっすぐに進みます。きつとほんとうの幸福を求めます」ジヨバンニは力強く言いました。

「ああではさよなら。これはさつききつぷの切符きつぷです」

博士はかせは小さく折おった緑みどりいろの紙をジヨバンニのポケットに入れました。そしてもうそのかたちは天気輪てんきりんの柱はしらの向むこうに見えなくなっていました。

ジヨバンニはまっすぐに走おって丘おかをおりました。

そしてポケットがたいへん重おもくカチカチ鳴るのに気がつきました。林の中でとまってそれをしらべてみましたら、あの緑みどりいろのさつき夢ゆめの中で見たあやしい天の切符きつぷの中に大きな二枚まいの金貨きんかが包つつんでありました。

「博士はかせありがとう、おつかさん。すぐ乳ちちをもって行きますよ」

ジヨバンニは叫さけんでまた走りはじめました。何かいろいろのも



のが一ぺんにジヨバンニの胸むねに集あつまってなんとも言いえずかなしい  
ような新しいような気がするのでした。

琴ことの星がずうつと西の方うつへ移うつってそしてまた夢ゆめのように足をの  
ばしていました。

ジヨバンニは眼めをひらきました。もとの丘おかの草の中につかれて  
ねむっていたのでした。胸むねはなんだかおかしく熱ほてり、頬ほおにはつめ  
たい涙なみだがながれていました。

ジヨバンニはばねのようにはね起おきました。町はすっかりさつ  
きの通りに下でたくさんあかりの灯つづを綴つづってはいましたが、その光はな  
んだかさつきよりは熱ねっしたというふうでした。

そしてたつたいま夢ゆめであるいた天の川もやつぱりさつきを通りに白くぼんやりかかり、まつ黒な南の地平線ちへいせんの上ではことにけむったようになって、その右には蠍座さそりざの赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置いちはそんなに変わかってもいないようでした。

ジヨバンニはいっさんに丘おかを走つて下りました。まだ夕ごはんをたべないで待つまているお母さんのことが胸むねいっぱいに思ひだされたのです。どんどん黒い松まつの林の中を通つて、それからほの白い牧場ぼくじょうの柵さくをまわつて、さつきの入口から暗い牛舎ぎゆうしやの前へまた来ました。そこには誰だれかがいま帰つたらしく、さつきなかつた一つの車くるまが何かの樽たるを二つ載のつけて置いてありました。

「今晚こんばんは」ジヨバンニは叫さけびました。

「はい」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て来て立ちました。

「なんのご用ですか」

「今日ぎゆうに牛ゆう乳にゆうがぼくのところへ来なかつたのですが」

「あ、済すみませんでした」その人はすぐ奥おくへ行つて一本の牛ぎゆうに

乳ゆうびん瓶びんをもつて来てジヨバンニに渡わたしながら、また言いいました。

「ほんとうに済すみませんでした。今日はひるすぎ、うっかりして

こうしの柵さくをあけておいたもんですから、大たい将しょうさつそく親おやう

牛しのところへ行つて半はん分ぶんばかりのんでしまひましてね……」

その人はわらいました。

「そうですか。ではいただいて行きます」

「ええ、どうも済みませんでした」

「いいえ」

ジヨバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもって牧場の柵を出ました。

そしてしばらく木のある町を通って大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になって、その右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行った川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが七、八人ぐらいつ集まって橋の方を見ながら何かひそひそ談しているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいつぱいなのでし

た。

ジヨバンニはなぜかさあつと胸むねが冷つめたくなつたように思いました。そしていきなり近くの人たちへ、

「何かあつたんですか」と叫さけぶようにききました。

「こどもが水へ落おちたんですよ」一人ひとりが言いいますと、その人たちは一いっ齊せいにジヨバンニの方を見ました。ジヨバンニはまるで夢むちゆ中で橋はしの方へ走りましました。橋はしの上は人でいっばいで河かわが見えませんでした。白しろい服ふくを着きた巡じゆんさ査も出ていました。

ジヨバンニは橋はしの袂たもとから飛とぶように下の広い河原かわらへおりました。その河原かわらの水みづぎわに沿そつてたくさんたくさんのあかりがせわしくのぼつたり下くだつたりしていました。向むこう岸ぎしの暗くらいどてにも火が七つ八

つうごいていました。そのまん中をもう鳥瓜からすうりのあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにせずかに流ながれていたのです。河原かわらのいちばん下流かりゆうの方へ洲すのようになって出たところに人の集あつまりがくつきりまっ黒に立っていました。ジヨバンニはどんなどんそつちへ走りました。するとジヨバンニはいきなりさつきカムパネルラといっしよだったマルソに会あいました。マルソがジヨバンニに走り寄よって言いいました。

「ジヨバンニ、カムパネルラが川へはいったよ」

「どうして、いつ」

「ザネリがね、舟ふねの上から烏からすうりのあかりを水の流ながれる方へ押おしてやろうとしたんだ。そのとき舟ふねがゆれたもんだから水へ落おつこ

つたろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟ふねの方へ押おしてよこした。ザネリはカトウにつかまった。

けれどもあとカムパネルラが見えないんだ」

「みんなさがしてるんだろう」

「ああ、すぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見つからないんだ。ザネリはうちへ連れられてった」

ジョバンニはみんなのいるそっちの方へ行きました。そこに学生たちや町の人たちに囲かこまれて青じろいどがったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服ふくを着きてまっすぐに立って左手に時計とけいを持もってじつと見つめていたのです。

みんなもじつと河かわを見ていました。誰だれも一ひと言ことも物ものを言いう人も

ありませんでした。ジヨバンニはわくわくわくわく足がふるえま  
した。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行つ  
たり来たりして、黒い川の水はちらちら小さな波なみをたてて流ながれて  
いるのが見えるのでした。

かりゆう下流の方の川はばいっばい銀河ぎんがが巨おおきく写うつつて、まるで水の  
ないそのままのそらのように見えました。

ジヨバンニは、そのカムパネルラはもうあの銀河ぎんがのはずれにし  
かないというような気がしてしかたなかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波なみの間から、

「ぼくずいぶん泳およいだぞ」と言いながらカムパネルラが出て来る  
か、あるいはカムパネルラがどこかの人の知らない洲すにでも着ついて



て立っていて誰かの来るのを待っているかというような気がしてしかたないらしいのでした。けれどもにわかにかムパネルラのお父さんがきつぱり言いました。

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」

ジョバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムパネルラの行った方を知っています、ぼくはカムパネルラといっしよに歩いていたので、と言おうとしましたが、もうのどがつまってなんとも言えませんでした。すると博士はジョバンニがいさつに来たとも思ったものですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていましたが、

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晩はありがとう」

とていねいに言いました。

ジヨバンニは何も言えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか」博士は堅く時計を握ったまま、またききました。

「いいえ」ジヨバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ、ぼくには一昨日たいへん元気な便りがあつたんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。

ジヨバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくだ

さいね」

そう言いながら博士はまた、川下の銀河のいっぱいにうつつた方へじつと眼を送りました。

ジヨバンニはもういろいろなことで胸むねがいつぱいで、なんにも  
言いえずに博士はかせの前をはなれて、早くお母さんに牛ぎゆう乳にゆうを持もつて  
行いつて、お父さんの帰ることを知らせようと思うと、もういちも  
くさんに河原かわらを街まちの方へ走りました。



# 青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年7月20日改版初版発行

1987（昭和62）年3月30日改版50版

入力：幸野素子

校正：土屋隆

2005年8月18日作成

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 銀河鉄道の夜

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>